甲南Today

甲友のリレーションで、未来を紡ぐ

2012 Mar NO.41



2012年オール甲南の集い スケジュールが決定！

なるほど！甲南アカデミア
理工学部 生物学科
久原 篤 講師

It's KONAN Style
スナーダイ・クマエ孤児院 主宰
メアス 博子 さん

<特集1>
「朝日新聞社×甲南大学」連携講座
"真実"はどこにある!?

<特集2>
西村教授が学生にかけた
マーケティングという"魔法"

<特集3>
知能情報学部コミュニケーションロボットプロジェクト
ロボットが漫才をする!?

甲南Today NO.41
2012年3月25日発行 ［発行］ 甲南学園広報部 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9-1 TEL 078-431-4341（代）

ONLY ONE —個性を力へ— VOL.12

「真の教育とは、人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の才能を引き出すことである」と提唱した、甲南学園創立者 平生釟三郎。
そんな平生の想いを込め、
今、甲南学園の光り輝いている学生・生徒をご紹介します。



U.S.キッズゴルフジャパン

キッズのゴルフ大会で世界一に！悔しさをバネに勝ち取った優勝

甲南中学校 1年
石過 功一郎 さん

夢は世界に通用するプロゴルファーになり、マスターズで優勝すること。ゴルフの技術はもちろん、語学など将来を見据えた勉強も。世界で活躍する目標を掲げ、ハードな練習に励む毎日。

苦い経験こそ成功の始まり 世界の強豪を制し手にした優勝杯

「今年は3位をめざしていました」石過くんはこう話してくれた。昨年度も日本予選を経て「U.S.キッズゴルフワールドチャンピオンシップ」に参加。しかし、残念ながら結果は7位だった。その悔しさをバネに、一心不乱に練習して臨んだ今年。シード権を獲得し、12歳の部で日本人代表が2名しかいない中、23か国約160人の強豪を制し、優勝することができた。同ランクで日本人が優勝したのは石過くんが初めて。

試合では終始優勢だったものの、最終日の序盤にスコアを崩す場面も。しかし、そこで気持ちを切り替え、強気に攻めたことが最大の勝因となった。最終ホールにおいて、昨年11歳の部での覇者である対戦相手がパットを外すも、石過くんは冷静に約2メートルのパットを沈め、見事念願の勝利を収めた。昨年の苦い経験をふまえ、この日を思い描き練習に励んだ毎日。今回の優勝は、技術の向上もさることながら、精神面での著しい成長が実を結んだ結果といえる。

どんな時も冷静でありたい メンタルの鍛練が躍進に

ゴルフを始めたのは7歳の時。お父さんにゴルフの練習場へ初めて連れていってもらったことがきっかけとなり、その時お父さんはすでにジュニア用のクラブを用意してくれていた。最初は空振りばかりだったが、2～3度練習に行くたびにだんだん球に当たるようになり、ゴルフが好きになった。

小学3年生の時、坂田ジュニアゴルフ塾（坂田信弘プロが主催するジュニアゴルフクラブ）へ入塾。一日300球ほど打つこともあった。今でも毎日100球ほどは打ち込んでいる。週1日は英会話教室にも通い、通学の電車の中でゴルフに関する英語の本を読むこともある。日々の努力が、技術面だけでなく精神面も成長させるのか、「試合でも緊張しない」のだそう。そのため自分の力を最大限試合で発揮でき、今回の優勝につながったのであろう。

そんな石過くんの目標とするプレイヤーは、フィル・ミケルソン選手。どんな時でも冷静なプレイスタイルに憧れる。中学1年生の石過くんの未来は無限大。そんな彼の今後の活躍に大いに期待したい。



U.S. Kids Golf ワールドチャンピオンシップ 【スコア表】	
コース：Pinehurst（ノースカロライナ州）	RND1：67
ヤード：6,000	RND2：67
	RND3：69
	TOTAL：203

KONAN
インターネットで甲南へ http://www.konan-u.ac.jp 携帯電話で甲南へ
Konan mobile

甲南Today

From the editorial staff

No.41
2012
March

今回では「甲南大学の教育」をクローズアップしました。学内外で注目度が高い3つの講義や取り組み。それぞれ領域は異なりますが、学生を自主的に取り組ませる教員の工夫や情熱が共通項として見て取れました。

今号の見どころ

03 教育特集 ①
文学部 井野瀬教授と朝日新聞大阪本社草川氏に、講義への思いを語っていただきました。

“真実”はどこにある!?



3年目を迎えようとしている朝日新聞社との連携講義。最前線で活躍するジャーナリストが教壇に立ち、現代社会を映し出す刺激的な講義です。今回はナビゲーターであるお二人が、講義の狙いや手応え、今後の展望を踏まえ、講座に懸ける思いをお話しします。

07 教育特集 ②
実社会の市場をステージに学んだ理論を試すゼミナールの活動を紹介します。

マーケティング”という魔法”

マーケティングは私たちの身近にあるおもしろい学問なんです。

「使える理論」を身につけるため、楽しみながら奮闘する経営学部 西村教授が率いるゼミの学生たち。その理由は、教授がかけた“魔法”と“思いやり”でした。



10 教育特集 ③
ロボットと私たちが笑顔で共生する社会はすぐそこかも知れません!?

知能情報学部コミュニケーションロボットプロジェクト

ロボットが漫才をする!?



Webニュースを題材に即興で楽しませる二人のロボット。

飽くなき挑戦と高度な専門の融合が、生んだ2体のロボットの愉快なコミュニケーション。“あいちゃんとゴン太”、そしてプロジェクトチームの活躍ぶりを紹介します。



13 ◎平生日記
平生釟三郎とスペイン・インフルエンザ

1900年代初頭に猛威をふるったスペイン・インフルエンザによる混乱を通して見える、平生釟三郎の冷静沈着な視点に、経済学部 後藤 励准教授が言及します。

14
プログラムが続々決定!さらにパワーアップする“集い”をいち早くご紹介。

オール甲南の集い2012

今年もスポーツにアート、エンターテインメントと盛りだくさん。詳細は本誌でご確認ください。

15
将棋とミュージカルにそれぞれ想いを馳せる二人の生徒をクローズアップ。

高中TOPICS



緻密な戦略で数々の将棋大会において好成績を残す高校生 中さんと、13歳の少年ながら劇団四季の舞台に立ち、観客を魅了する中学生の池本さんの活躍ぶりを紹介します。

17
先生!知の最前線を教えてください

理工学部 生物学科
久原 篤 講師



なるほど! 甲南アカデミア

わずか1ミリの線虫に託す大きな夢 −地球温暖化から

人と遺伝子が類似する「線虫」を用いて、生き物が温度を感じる仕組みを解明しようとする興味深い研究を紹介します。

19
第一線で活躍する卒業生。

メアス 博子 さん

スナーダイ・クマエ孤児院 主宰

It's KONAN Style



カンボジアの子どもたちの“お母さん”として奮闘する女性です。

ひょんなきっかけから、カンボジアで孤児院を運営することに…。なんのマニュアルも無い、子どもたちへの想いだけを頼りに、心に寄り添っていくプロセスをお話いただきました。

21
フランス甲南学園 トゥレーヌだより



生徒たちが仏語劇に挑戦!さて、そこでみんなが得たものとは一体…?

22
バーニーズ ニューヨーク × 甲南学園



新しい甲南グッズが誕生!その裏側には卒業生の母校愛がありました。

23
草花をこよなく愛する甲南大生と鉄道研究部がひも解いた「岡本駅」の歴史。



こちら 甲南特捜部
みなさまから寄せられた疑問を徹底調査!

大好きな草花の研究を進める過程で、希少植物を発見した理工学部 高野さん。そして、毎回好評をいただいている鉄道研究部による調査報告の豪華2本立てです。

25
KONAN FORUM



世界で活躍する指揮者 佐渡 裕さんとスーパーキッズ・オーケストラが、甲友会館で行ったリハーサルをレポート!ほか。

裏表紙
ONLY ONE −個性を力へ−



アメリカで行われたキッズのゴルフトーナメントで世界一を成し遂げた、スーパー中学1年生を紹介します。

▲【表紙の絵】西井 義晃 画「大学1号館と桜」 西井 義晃さん プロフィール 1961年甲南大学経済学部卒業 元自由美術会員

教育特集 ①

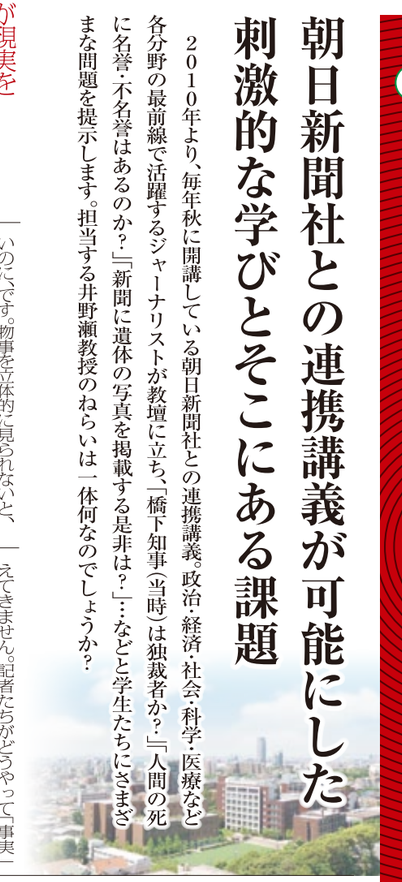
“真実”はどこにある!?

甲南大学 × 朝日新聞社

「阪神文化論」

朝日新聞社との連携講義が可能にした刺激的な学びとそこにある課題

2010年より、毎年秋に開講している朝日新聞社との連携講義。政治・経済・社会・科学・医療など各分野の最前線で活躍するジャーナリストが教壇に立ち、「橋下知事（当時）は独裁者か？」「人間の死に名誉・不名誉はあるのか？」「新聞に遺体の写真を掲載する是非は？」…などと学生たちにさまざまな問題を提示します。担当する井野瀬教授のねらいは一体何なのでしょうか？



メディアが現実をつくっている!?

この講義は、私が親しくさせていただいている朝日新聞社の草川さんとの雑談の中で得たアイディアを形にしたものです。草川さんは現在、朝日新聞大阪本社代表室長補佐として大学連携を担当するとともに、これまで新聞記者として、また記者採用の面接官としても、第一線で活躍してこられた方です。

私にはこの数年、ずっと気になっていることがあります。それは、物事を立体的に見て全体を把握しようとする学生が少ない、あるいはそうすることがとても苦手な学生が多い、ということです。それ以前に、「物事を深く考える」とはどういうことか、わからない学生が多いことにも驚かされます。インターネットで自分の興味のあることだけを検索することに馴れているからでしょうか、自分以外の見方、考え方をうまく想像することができないようです。けっしてその力がないわけではないのに、です。物事を立体的に見られないと、「真実」というものは見えてこない。社会に出ると、とても困ります。

問題は、現実をどう見るかです。私たちが知っている「見ている思っている“現実”とはいったい何なんでしょう。たとえば、日本にいる私たちが、中東の民主化革命やヨーロッパの金融危機の詳細を知っているのはなぜなのでしょうか。新聞やテレビ、インターネットなどのメディアがその情報を伝えているからですね。この状況を言い換えれば、もしメディアが伝えなければ、中東の革命も欧州の金融危機も、私たちの現実としては「ないこと」になってしまう――かくして、私たちの現実は、メディアによってつくられているといっても過言ではないのです。

ですから、さまざまな角度から光を当て、そこから見える“事実”をしっかり注視する必要があります。光の当て方によっては見える“事実”も違ってきますから、できるだけ多くの“事実”を集めないと“真実”“本当のこと”は見えてきません。記者たちがどうやって“事実”を集め、“真実”に迫っていこうとしているか――草川さんと話していて、それを学生たちに見せたいと思いました。

と同時に、新聞記事の内容を“他人事”として考えず、“自分事”として捉える想像力も身につけてほしいと思いました。たとえば、新聞記事で「イラクで戦争が起こっている」と知る。それで終わりにしないでほしい。新聞が伝える事実に潜む問題の本質を、“自分事”として具体的に考えてほしい。イラクでの戦争と「私」がどうつながっているか、それを想像してほしいのです。この姿勢こそ、“真実”を知ろうとすることに他なりません。この講義には、そういう願いと狙いが込められています。

ここに、若者の新聞離れを深刻に受けとめる朝日新聞社の危機感が重なり、さまざまなジャンルの部局で仕事する朝日新聞社の方が本学で講義する今が生まれました。

さて、講義では、朝日新聞社からの厚意あふれるご提案で、次のような非常に丁寧な講義づくりが実現しています。

①講義は、担当ジャーナリスト、ナビゲーターの草川氏、そして私、井野瀬の3人で行う。

②毎回、草川氏が学生のリアクションペーパー（受講生が質問や感想を記入する用紙）を熟読し、次の講義でその解説、問題点の指摘を行う。

③毎回、講義終了後、概要と資料をHPにアップし、学生の復習に利用してもらう。

④エントリーシート（就職試験を受ける際、最初に企業に提出する用紙。志望動機や自己PRを記入する）、「私」という自由作文を草川氏が詳細に添削し、講義で例をあげながら講評する。

本講義は、最前線にいる多忙なジャーナリストが毎回立ち会ってくださり、しかも社会人基礎力として必須の文章表現力をも手厚く指導してくださるという、ある意味とても贅沢な講義です。そして、その内容や講義時の資料をHPに公開するだけでなく、一般の方の講義参加も大歓迎です。社会人の方がまじめに学ぶ姿勢は学生の刺激になりますし、学外の客観的かつ厳しい評価を受けながら、内容のさらなる充実に生かしたい。

ある意味、私にとってこの講義は、教育者としての“試練”でもあるのです。それを私は大いに楽しみたいと思います。

甲南大学学長補佐　文学部教授
井野瀬 久美恵

アーカイブス
講義ライブ！

2011年度に開講された講義から、3つのテーマをダイジェストで紹介します。
皆さんはどう感じますか？ご一読ください



【第9回　作文添削】

講師／朝日新聞大阪本社 代表室長補佐　草川誠氏

受講生たちが提出した作文「私」（1000字）を添削しつつ4例をパワーポイント化して説明した。大切なのは具体的に書くこと。「一生懸命、頑張りました」と書いても伝わらない。「グラウンドを20周走った」と、腹筋を200回」と書けば伝わる。「起承転結」を大事に。具体的なエピソードから入り（起）、なぜそうなったのか（承）、別の角度からの見方（転）、結論（結）というように展開する。センテンスは20～30文字に。「お母さんは、母」「やっぱりは、やはり」「すごくは、大変、非常に、激しくなどに。主語と述語、修飾語と被修飾語の位置を近づける。「は」と「が」「に」と「へ」を使い分ける。「は」は限定されたものに付く助詞。「野田首相はほOKだが、鈴木さんは」と書いても、どこで何をしている鈴木さんなのかを限定しないと、「は」は使えない。

井野瀬教授の講評／“Inose Magic”という言葉をご存知でしょうか（笑）。ゼミ生が書いた卒論の下書きに私が赤い修正を入れると、たちまち文章が生き生きと説得力を持って語りかけてくる。“先生、これはマジックです！”――というわけで、ゼミ生たちがつけた“文章をよりよいものに変える魔法”が、“Inose Magic”です。一度修正を入れると、“ああ、なるほど…”と、次からとてもいい文章を書いてきます。文章って不思議ですね。

私も草川さんも言葉を駆使する職業についており、“言葉が人間に対してどれほど大きな力を持つか、いろいろな経験をしてきました。それを踏まえた過日の授業で、皆さんも、少し表現を変えるだけで文章がまった く違う印象を与えることに気づいたでしょう。文章作成においていくつかの約束事があることも学んだと思います。それを日常生活に生かしてください。たとえば、メールを書くとき、“この言葉で伝わるかな”と少しだけ意識してみる――それだけですいぶんと違ってくるものです。文章って、ほんとうに不思議です！

【第11回　1面トップ、これでよいのか】

講師／朝日新聞大阪本社広報担当次長 外園周二氏

編集センターは、原稿のニュース価値を判断し、どのニュースをどの面に入れるか決めていく。編集者は悩みに悩む。とくに1面は“新聞の顔”。最も大事と判断したニュースを選んでいく。新しいニュースが届くたびに、この作業を繰り返す。出稿部と編集センターとの意見が対立した場合には、編集長が最終決断をする。大阪府警の警察官が、30年間にわたり、土地の売買をめぐって友人をだまし、5億円を受け取っていたとして、詐欺容疑で逮捕されたという記事に見出しをつけてみよう。次に、朝刊の実際の出稿予定にあった9本の記事リストから5本を選び、どれがトップ、カタはどれ、というように、1番から5番までの順位を自分なりにつけてみてほしい。1面トップの記事も、各社で異なる場合が多い。みなさんも、自分の意見や価値判断を持って、“トップ記事はこれでよいのか”と、記事の紙面扱いを疑うぐらいの姿勢でメディアに向かってほしい。

井野瀬教授の講評／毎週の講義時にその日の朝刊を持参すること――これが本講義における唯一の約束事です。ところが、講義開始以来ずっと、この約束が守れない受講生の多いことに、私は少なからず失望しました。本学教員として恥じてもおりました。今回は担当者のご配慮で朝日新聞を配付いただけましたが、驚いたことに、日頃新聞を読まないと言っていた受講生たちが、“配布された新聞のページを興味深げにめくる姿をいくつも見つけ、とてもうれしくなりました。新聞紙面がどうやって作られているのか、一面トップはこの並びでいいのかといった、この日の講義で得た新たな“発見”を加えて、受講する学生たちが新聞を読むことに意味を見出してくれることを心から願っています（講義自体、双方向で学生たちの反応もとてもよく、教員としてFDの勉強にもなりました）。

【第14回　この国の貧困】

講師／朝日新聞大阪本社 代表室長補佐　草川誠氏

1980～90年代、“1億総中流”意識が広がった。しかし、21世紀に入り、格差が拡大した。労働者派遣法は“専門的な13業務のみを対象として、1986年に施行された。99年には、製造業など7業務以外が原則自由となり、04年には製造業への派遣も解禁された。派遣労働者は04年に寄200万人、08年は380万人を超えた。日本の相対的貧困率は全世帯の16・0％。OECD30カ国中、日本はメキシコ、トルコ、米国に次いで4番目に高い。経済連携協定によってインドネシアフィリピンの看護師候補、介護福祉士候補が計千人来日した。看護師候補は3年以内、介護福祉士候補は4年以内に国家試験を受験する。これに合格しなければ帰国させられる。看護師試験では09年、32人が受けて合格者ゼロ。10年は254人中2人が合格。11年は399人中16人が合格した。日本人を含めると本来、合格率92％の試験だ。問題は漢字で「褥瘡」「仰臥位」などが読めない。1年の試験からふりがなと英語併記が認められた。医師不足も深刻だ。「医師が増えれば医療費が増える」などという「医療費亡国論」を83年に当時の厚生省保険局長が発表した。このため国は、医学部の入学定員を削減した。厚労省は、医師は偏在しているだけで不足していない、と言い続けてきたが、08年秋にようやく医師不足を認めた。人口10万人当たりの医師数はOECD30カ国平均が約300人。日本は約200人。トルコ、韓国、メキシコに次いで少ない。日本で最も多い徳島でも260人ほど。偏在ではなく、日本国中どこでも医師は不足している。

井野瀬教授の講評／21世紀に入り、“世界がつながる”という言葉をよく耳にしますが、今回の講義では、それがどういうことなのかを考えさせられました。グローバル化の進展、それを後押しするIT革命の深化、そこから編み出されたさまざまなネットビジネス、そのなかで多様化する働き方、暮らし方、生き方――これらが絡み合うなかで、貧困の考え方も現実も、実に短期間の間に、多様化、多層化したように思います。私が大学で教え始めた20年余り前、日本では、一億総中流との言葉を頻繁に耳にしました。それが今、“格差社会”をキーワードとする社会に変わろうとしているとは…。

そんな急激な変化の時代を生きていることを、少しだけ意識してみてください。その行きつく先は何なのでしょうか。それを決めるのはあなた方です。そのことを忘れずに、現代日本の貧困問題をこれまでよりは少しリアルな目で見つめながら、その解決の道を考えてみてください。私は、今回のレスポンス・ペーパーに若い受講生の皆さんが考える“リアリティ”を見たいと思います。

2011年度「阪神文化論」講義タイトル

- 第1回「オリエンテーション」　講師：草川誠（代表室長補佐）
- 第2回「橋下知事は独裁者か」　講師：池尻和生（社会部大阪府庁担当記者）
- 第3回「事件現場のことを話そう」　講師：草川誠（代表室長補佐）
- 第4回「新聞とネット、その意外な関係」　講師：筑瀬重喜（記者）
- 第5回「報道写真と新聞」　講師：山本雅彦（写真部長）
- 第6回「フクシマで何が起きたか」　講師：桑山朗人（科学医療部長）
- 第7回「大震災・原発事故とコスト」　講師：鈴木直哉（経済部長）
- 第8回「現代の戦争と日本」　講師：吉岡一（生活文化部次長〈元中東・アフリカ特派員〉）
- 第9回「作文添削」　講師：草川誠（代表室長補佐）
- 第10回「あなたが裁判員になる日」　講師：豊秀一（社会部次長）
- 第11回「1面トップ、これでよいのか」　講師：外園周二（広報担当次長〈前編集センター次長〉）
- 第12回「朝日新聞をレスキューする」　講師：水野幸子（校閲センター次長）
- 第13回「エントリーシート添削」　講師：草川誠（代表室長補佐）
- 第14回「この国の貧困」　講師：草川誠（代表室長補佐）
- 第15回「核ミサイルはこう発射される」　講師：草川誠（代表室長補佐）

「阪神文化論」
対談
HANSHIN BUNKARON TAIDAN

“真実”とは何か。その探究によって学生たちが手にするものとは？

最前線で活躍する新聞記者や報道カメラマン、さらには編集・校閲のプロフェッショナルたちが、現代社会を映し出す多彩なテーマを、縦横無尽に語りつくす刺激的な講義の数々。ナビゲーターとして学生たちを導く文学部・井野瀬教授と、朝日新聞大阪本社・代表室長補佐の草川氏に、この講座への思いを語っていただきました。

「何か一緒にできないか」その言葉が出発点だった。

草川　井野瀬先生が私に「学生たちの物事を見る目を養うために、何か一緒にできないか」と提案してくださったのが、すべての始まりでしたね。

井野瀬　２０１０年の１月頃ですね。その年の９月に開講しましたから、大学という世界では、驚くほどのスピードです（笑）。私たちを駆り立てたのは、現代の若者に対するそれぞれの想いでした。言葉にすると照れますね。私の場合は、学生の「全体を見渡そうとしない視野の狭さに対する危機感です。新聞をほとんど読まず、インターネット検索で興味のあることだけをサーチする。これでは真実を見抜く力が育つはずもない。何とかして物事全体を立体的かつ多面的に見る能力を養えないか。そんなことを思っていました。

草川　若い記者たちに対して、私も「物事をステレオタイプに見るな。思い込みをするな」と常に言ってきました。取材前には下調べをし、ある程度の仮説を立てるのですが、その仮説にしがみつくようでは失格。記者という仕事の醍醐味は、取材をする中で、自分の立てた仮説が砕け散る瞬間にありますから。思い込みを排し、様々な事実のかけらを丹念に集めて率直に見る。それを繰り返すことで真実に近づく。これは何も取材者に限ったことではありません。人間が生きて行くうえで、一番大事なことだと考えています。それを学生さんたちに伝えるのが、この連携講義で果たすべき私の役割かなと。

傷つきやすい若者たちに教えたいことの数々。

井野瀬　今日はせっかくの機会ですから、草川さんから甲南大生に対する忌憚のないご意見をうかがいたいと思っています。講義を通して、特に印象に残っているエピソードはありますか。

草川　講義中、寝ている学生が他大学に比べて多い。また、リアクションペーパーに記してくる質問も少ないですね。

井野瀬　それは私も悩んでいます。この講義は必修科目ではないこともあるのでしょうか、自ら選んだはずなのに、残念ながら寝ている学生が多いですね。

草川　私の力量不足かなと反省しているのですが。

井野瀬　私も自分の問題として考えました。



実際に講義を何度も聴いている本学職員は、「こんなにおもしろくて、ためになる講義はないと言ってくれるのに、学生は起こしてもまたすぐに寝てしまう…。今後改善すべき問題です。

草川　いいこともたくさんありますよ。一つ選ぶとすれば、作文指導のときに、交通事故の後遺症に苦しむ母親のことを書いてくれた学生がいました。厳しい環境に置かれながら、前向きな姿勢を貫こうとする、ひたむきな人間性が活写されていました。ぜひ他の学生にも知ってほしいと思い、名前を伏せて授業で紹介したんです。するとその学生からこんなリアクションが返ってきました。「授業の中で紹介されると知っていたら、書かなかった。でも、そのおかげで母のことを友人にも話せるようになりました。感謝しています」。これを読んだとき、「ああ、甲南大学とご縁ができてよかった」と心の底から思いました。大学で教えることは、とりもなおさず、自分が教えられることですね。



草川 誠 氏

1957年、京都生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。1984年、毎日新聞社入社。地方支局を経て、大阪本社社会部勤務。1993年、朝日新聞社入社。大阪本社社会部（核取材班、大阪市役所担当、大阪府警担当キャップ）、社会部次長、広報部次長、大津総局長、生活文化部長、編集局長補佐などを歴任し、2010年より代表室長補佐兼広報担当部長兼大学総合センター長。



甲南大学学長補佐　文学部教授
井野瀬 久美恵

悩みとジレンマを経験し、「自分のこと」として考える人間に。

井野瀬　それこそ、まさしく教育のもつ双方向性ですね。学生たちに教えられるからこそ、私たちも成長できる。

草川　ええ。授業を通して若者たちと接していると、私自身が堕落しなくてすむかもしれない、とさえ感じます。

井野瀬　いいお話をありがとうございます。甲南大生の良さは、偏差値で測れない、“伸びしろ”をもっていること。それを伸ばすのが私たち教員の役割で、そこに草川さんのお力をお借りしたかったのです。

ところで、今の学生たちは、なぜかとても傷つきやすい。どうやらその根底には、ことばに対する理解の問題があるようです。シェイクスピアの『マクベス』の冒頭に「きれいはきたない。きたないはきれい」というセリフがありますが、このセリフのように、ことばは常に重層的かつ多義的なものです。“お前なんか嫌いだ”ということばの中に深い愛情が隠されていることもあるように…。とても傷つきやすい若者たちだからこそ、この講義を通じて、ことばの重層性や多義性への理解を深め、タフな精神をも培ってほしい。これも、“真実はどこにある？”ということですよね。

井野瀬　それから、もう一つ、私が重視しているのは、「自分のこととして考える姿勢」です。グローバリゼーションが進む現在、世界の出来事はすべからく、少なからず、互いに関連しあっています。ですから学生たちには、東日本大震災や福島第一原発事故問題はもちろんですが、イラク戦争やヨーロッパ発の経済危機なども、「遠い外国の出来事」ではなく、「自分のこと」として感じ、考えてほしい。イラクの子どもたちが劣化ウラン弾に苦しんでいるのはどういうことなのか。あの戦争の大義はどこにあったのか。あの戦争と自分の日常は、どのように関係しているのか。このように「自分のこと（自分事）」として考える姿勢が、社会に責任をもってかかわる第一歩になると思います。

草川　そのとおりですね。私は、東日本大震災やイラク戦争の「事実」を伝える新聞そのものが、悩みとジレンマの中でつくられていることも伝えたいと思っています。たとえば震災直後の被災地では、遺体の収容より生存者の捜索を優先せざるを得なかったでしょう。捜索にあたった人たちに、遺体への尊崇の念がない訳では決してない。彼らは目の前の遺体に心を痛めながら、葛藤の中で自らのとるべき行動を選択したはずです。新聞の紙面も日々、悩みとジレンマの中から生まれています。どの記事を掲載するか、どの写真を選ぶのか。おそらく、そこに正解なんてありません。もちろん論理的に考えてつくるのですが、究極の選択基準はどこにあるのかと問われたら、「自分の人生そのもの」と答えざるを得ない。我々は新聞を、人生をかけてつくっているのです。

就職にも役立つこの講義を活用してほしい。

井野瀬　この講義には、草川さんが自ら講評してくださる「心をつかむ作文術」や「エントリーシート添削」など、就職活動に向けた実践的なプログラムも組み込んでいます。就職活動はもちろん、社会へ出れば、自分の考えを自身のことばで伝えることが非常に大切になってくるので、本講義を貪欲に活用してほしいですね。今の学生は、伝える力にも非常に弱くなっていますから…。経済について尋ねると、「現代日本の問題は…」なんて、どこからか借りてきたような論調になる。インターネットのどこかのサイトにある文章をそのままコピペするせいですね。アルバイトで接するお客さんの数が減った」など、身近な実体験に則して考え、具体的に表現してこそ、説得力も生まれるのですが…。

草川　読書量の少なさも影響しているかもしれませんね。甲南大生に限ったことではありませんが、場の空気を読んで、質問や発言を遠慮する学生が多いようにも感じます。KY（空気が読めない）と呼ばれることを極端に恐れているのでしょうか。

井野瀬　私と草川さんがそうなのですが、人と人が真剣に意見を交わせば、1＋1が5にも10にもなる。学生にもそういう社会人になってもらいたい。生身の人間同士で議論し、恥ずかしい思いをして、「これが自分に足りないから、次はこうしよう」と、打たれ強くなってくれることを願います。

草川　そうですね。同時に、私たちも講義内容をさらに充実させましょう。２０１２年度は、出来れば普天間問題を取り上げたいと思っています。ちょっと敷居が高いかもしれませんが。

井野瀬　ぜひやりましょう！東日本大震災も引き続きテーマにしたいですね。それが阪神淡路大震災を経験した甲南大学の使命だと思うからです。真剣に講義を聴いていない学生が自立above、朝日新聞社さんもこの連携講義を中止せざるを得なくなります。私もさらに気持ちを引き締めて臨みます。草川さん、２０１２年度もお力をお貸しください。よろしくお願いいたします。

2012年度も朝日新聞社との連携講義「阪神文化論」を後期（9月～）に一般開講いたします。

（問合せ先：文学部事務室
（TEL：078-435-2755））
詳しくはこちらをクリック！

甲南大　阪神文化論　検索

西村教授が学生にかけた、マーケティングという〝魔法〟

〝製品やサービスを適切に消費者へ届けるための活動〟に関する理論を学ぶマーケティング論。難しそうと感じられますか？経営学部 西村教授はこう語ります。「マーケティングは、私たちにとって、とても身近でおもしろい学問なんですよ。確かに、西村教授のゼミナール（以下、ゼミ）では、学生たちが実に楽しそうに学んでおり、人気の高いゼミのひとつ。マーケティングとは、それほどまでに魅力ある学問なのでしょうか…？



経営学部　経営学科
西村 順二 教授

西村流マーケティング論 ①
「使える理論」を考え、実践するために。

JR大阪駅にある女性専用のお化粧直しスペース〝アンジェルブ〟、尼崎中央商店街、ネスレさん、アシックスさん、神戸市さん…。私のゼミでは、これらの企業や地方自治体、地域団体等と一緒に、商品開発やイベントの企画・実行をさせていただいています。最近では、製紙会社とコラボレーションし、梅炭由来のオリジナル紙を使ったエコプロダクツを研究し、ゴミ箱を考案。さらには、口ゴマークやCMの制作まで学生が手がけたんですよ。

学生たちは、まず私の授業で論理的思考を身につけ、マーケティングの実践者である企業に提案します。すると、さまざまな意見をいただくことができます。それを持ち帰ってさらに理論を構築し、また現場にぶつけてみる。

こうした活動に重点を置いているのは、学生たちに〝使える理論〟を身につけさせたいからです。また、現場（実践）と授業（理論）の相互作用により、生きたマーケティングを学ぶことができます。こういった理由から、私がお付き合いさせていただいている企業等を中心に、学生をどんどんかかわらせているのです。

私は、常に「エビデンス（根拠）を示すように」と言っています。自分で問題を発見し、いろいろと調査して導き出した解決策には当然ながら根拠があります。それらを提示し、論理的に説明することを求めるのです。解決策をインターネットで拾ってくるだけでは身につきませんし、考える力は養えませんから。自立と自律両方を実現できている人間に育ってもらうためのプロセスです。

学生たちは必死に、ですが非常に楽しそうに取り組んでくれます。自分たちの提案が実際に形になって世に出ていきますし、テレビや新聞に取り上げられることもありますから、充実感は大きいでしょう。しかし、その分学生たちと私の責任は重い。企業の方たちにも真剣に叱っていただきます。こうして学生たちは、卒業する前に社会性も身につけていきます。

プロジェクトは常に4～5人のチームで動き、原則3か月程度を1サイクルとしています。プロジェクトごとにメンバーを入れ替え、リーダーも毎回変えます。多様な考えをもつメンバー同士が議論を交わし、意見をまとめ上げていくことで、コミュニケーション力や協調性、想像力や構想力などが養われ、リーダーシップも備わってくるんですね。これらの力を引き出すこともゼミの狙いとしています。

西村流マーケティング論 ②
マーケティングの学問的おもしろさ。

マーケティングとは単なる「販売」ではなく、企業と消費者の相互作用です。「誰を対象にするのか？」「ターゲットとしたい層に受け入れられるためには？」といった課題を、市場の調査や分析など、マーケティングの多様な理論にもとづき考察します。市場を年齢・性別・収入等の属性で細分し、ターゲットを定めるなど、いわゆるSTP（P8参照）と呼ばれる手法を用いたり、製品（Product）や価格（Price）、流通（Place）、プロモーション（Promotion）といった4つのP（P8参照）を組み合わせて考えるなどして、最大の効果をめざします。

たとえば、ルイ・ヴィトンのバッグはコンビニでは売られていませんし、新聞の折り込みチラシの広告もしませんよね。これは、ルイ・ヴィトンにとって一番望ましいと判断された4つのPの戦略的組み合わせの結果なのです。この組み合わせ方は企業によって異なり、ここを考えることがマーケティングのおもしろさでしょうね。

私はマーケティングほどみなさんになじみやすい学問はないと思っています。誰もが消費者であり、自分を投影しやすいからです。今日の洋服のチョイスやランチのメニュー選択など、常に我々は選択意思決定をしているでしょう。消費者の視点を通すとマーケティングはとても身近で、興味が湧いてきますよ。

西村流マーケティング論 ③
マーケティングは〝人への思いやり〟。

マーケティングは、企業の利潤の追求だけにとどまらず、地域の活性化や人を元気づけるなど、多様な役割を担っています。顧客等関係する人の満足度をいかに高めるかが重要なキーとなるマーケティングは、つまるところ、〝いかに人を思いやるかを考えること〟だと思うのです。

みなさんも、恋人や家族、友達など大切な人に対して「この人が今欲しいものは何だろう」「とか」どうすればこの人を楽しませることができるか」など、考えたり思いやったりすることがあるでしょう！これこそがマーケティングの原点で、私たちが人間関係を築くためにも重要なことです。このことを学生たちが学び、多くの人から信頼され、社会に貢献する人物になってくれればと願っていますし、私のゼミで学んだ学生はそうなれると信じています。

お伝えしたとおり、西村ゼミにおいては学生たちが興味をもって学べる工夫が施されています。同時に、何より学びを魅力的にしているのは、西村教授の〝学生を思いやる気持ち〟だということがうかがえました。西村ゼミそのものがまさにマーケティングの実践なのです。学生たちに生き生きと学ばせる〝魔法〟。それは、西村教授の彼らへの〝愛情〟に違いありません。

次ページからは、西村ゼミの数々の特色ある取り組みの中から、2つの事例をピックアップしご紹介します。

西村ゼミ 4年次メンバー（本文登場学生除く）

池田 祐子さん　植村 淳平さん　大平 多記さん　奥野 彩さん　何 倩茹さん
川端 みなみさん　喜田 いずみさん　黒江 春香さん　佐藤 大起さん　澤村 亜紀子さん
白石 理沙さん　新谷 玲奈さん　田中 志乃さん　田淵 敬祐さん　永井 佑樹さん
林 美里さん　平田 奈々恵さん　福原 詩貴子さん　宮内 彩香さん　宮崎 貴裕さん
山内 拓也さん　山下 祐果さん　吉田 明加さん



随所に甲南らしさをデザイン。

ケーススタディ1 **商品企画**

甲南大学オリジナルスポーツウエアを開発！

コンセプトは、“Loving Konan”。

「㈱アシックス×甲南大学生協×西村ゼミ」

西村ゼミでは、大学生協ともしばしばコラボレーションしています。中心となったのは4年次のメンバー。ゼミを代表して、永井基裕さん、竹内亜喜さんからお話を聞きました。

竹内　「大学オリジナルグッズの開発と購買部のレイアウト変更に関して、ご相談いただいたことがはじまりでした。レイアウトについては、消費者の心理である〝左回りの法則〟にもとづいて動線が変わるようにし、冷蔵庫も後ろから商品が補充できるものに変える提案をしたところ、売り上げが飛躍的に伸びたそうです」。この成功が、西村ゼミの学生たちのモチベーションを大きく向上させ、彼らは、大学オリジナルグッズの開発に着手したのです。

永井　「商品開発にあたり、市場調査は不可欠。全国10校以上のグッズの売れ行き調査、100人以上の学生へのアンケートも実施。SWOT（スウォット）分析の応用により、商品の強みや弱みなどを特定。課題を導き出しました」。西村ゼミの本領発揮ですね。この結果、甲南大学オリジナルキューピーが製品化されました。

続いて、「新入生から、体育の授業で着る大学指定のスポーツウエアはないかという問い合わせが多い」ということから、今度はスポーツウエアを西村ゼミが開発することに。

永井　「製品は、西村教授のつてでスポーツ用品メーカー大手のアシックスさんでつくっていただくことになり、打ち合わせを重ねました。僕たちのこだわりは、〝愛校心〟。学生のみんなにもっと甲南を好きになってほしいから。〝デザインを決めるのは大変でしたが、愛校心をテーマにしているので、がんばりました」。オリジナルマークのハートは母校愛、翼は甲南の創立者 平生釟三郎の〝世界に通用する紳士・淑女たれ〟という理念を、さらに〝個性の尊重〟という意味を込めて、形違う10枚の羽でその翼を表現したということにこだわり。また〝KONAN〟の〝O〟は、梅林で有名な岡本を象徴する梅をあしらい、地域一体という想いも込めました。

竹内　「素材についてもあれこれと考えたのですが、利益を出さないといけないという大命題があって、バランスを取るのに苦労しました。私たちの甘さを何度も指摘され、プロのものづくりの厳しさを感じましたね」。

こうして生まれたのがスウェットパンツとポロシャツにTシャツ。今年2月から甲南大学生協にお目見えしました。西村ゼミの〝愛校心〟が、これらのウェアとともにたくさんの学生へ伝播していけば素敵ですね。



甲南大生なら、オリジナルウエアをベースに着こなしを楽しんで！と開発メンバー。



経営学部　経営学科　4年次　永井 基裕さん



経営学部　経営学科　4年次　竹内 亜喜さん

マーケティングの基礎知識

●SWOT（スウォット）分析
自らの強み（Strength）弱み（Weakness）と自らが置かれた経営環境の機会（Opportunity）脅威（Threat）を整理・分析、評価、特定し、適切な戦略を立案するための手法。そこから自社が実行、克服すべき内容や、回避、撤退すべき内容が導き出されます。

●STP
誰に対してどのような価値を提供するのかを明確にするための手法。大きな市場をある条件に従って細分化する「Segmentation（セグメンテーション）」、ターゲットを定める「Targeting（ターゲティング）」、他社との差異化を図るための切り口を考案する「Positioning（ポジショニング）」の略。

●4P
標的市場から自社が望む反応を引き出すために、Product（製品）、Price（価格）、Place（流通）、Promotion（プロモーション）の4つマーケティングツールを効果的に組み合わせる手法。マーケティングミックスとも呼ばれています。

●左回りの法則
人間は、心臓のある左側に回る時は心地よく感じ、そういった空間には少しでも長くいようとする。滞在時間と売上は比例するという分析結果のもと、少しでも売上をあげるために多くのスーパーマーケットなどの小売店は左回り動線に設計されている。



西村ゼミが集めた、“神戸からの応援メッセージとポラロイド写真”を前にほほえむ被災者の方々



ケーススタディ2 イベント企画

KOBE 豚まんサミット

神戸から被災地へ。ぼかぼかの味と心を届けて。

はじまりは「豚まんで神戸を元気に！」だった。

1月17日、宮城県名取市。東日本大震災で大きな被害を受けたこの地に、西村ゼミの学生2人、山田桂司くんと木村 彰くんの姿がありました。彼らは、神戸・南京町の名物であるぼかぼかの“豚まん”を、寒さの厳しい被災地に届けに来たのでした。

ことの始まりは、さかのぼること約10か月前のこと、神戸の老舗中華料理店「三宮一貫樓」の専務（当時）で甲南大学のOBでもある安藤氏が、「神戸の街を豚まんで元気にしたい」と西村教授に相談を持ちかけてこられたことでした。早速西村ゼミの学生たちが動き出し、日本で初めて豚まんを販売したとされる南京町の「老祥記」、元町の「四興樓」、そして「三宮一貫樓」の3店舗を中心にして「豚まんサミット」を開催することを決定しました。場所は神戸の中華街、南京町。メインイベントは、豚の鼻を表して11月11日（KOBE豚まんサミット実行委員会が「豚まんの日」として登録）となりました。

西村ゼミの企画提案の下、注目は、3店舗がそれぞれに趣向を凝らしイベントのために考案した「サミット限定豚まん」を、各1個ずつ3個セットにして販売するというもの。また、西村ゼミの学生たちもオリジナル豚まんの開発に挑戦。前夜祭として「豚まん娘コンテスト」も企画…、次々と企画が固まっていったのです。

大震災の被災地に対して、豚まんサミットとしてできることは？

そもそも、安藤氏たちは、豚まんを使ったイベントを実施し、売上金を東日本大震災被災地への義援金として寄付される計画でした。

山田「現地に行き、ぼかぼかの豚まんを食べていただくことが、被災地の皆さんに一番元気を届けることができるという西村先生の提案に従い、西村ゼミの総意として安藤さんに提案したところ、採用になったんです」。これをきっかけに、彼らの意気込みは一段と増していきました。

木村「甲南オリジナル豚まんの開発にあたっては、南京町へ行ってアンケート調査をしました。意外に、女性でも豚まんならこってりしている方が好きで、しかもヘルシーであればなお良いという回答が多かったんです。20種類くらい試作した結果、“ぼっかけ＝牛すじ肉とこんにゃくを煮込んだ料理”を入れることに。ぼっかけは、阪神淡路大震災のとき大きな被害を受けた街、神戸市長田区発祥の料理でもありましたから、長田地区が復興を遂げたメッセージを盛り込むことも考え、これに決めようと」。

「豚まんサミット2011」は大盛況となり、新聞などで大きく話題を呼びました。

山田「僕たち学生のアイディアで何かできないかと考え、豚まんを買いに来たお客さんに承諾を得て、ポラロイドカメラで撮影し、被災地へのメッセージを書いてもらったんです。250の写真とメッセージが集まりました」。

自分がボランティアをするなんて偽善だと思っていた…。でも、違っていた。

そして、サミット成功の自信と豚まん、東北を応援するメッセージが綴られたポラロイド写真を携えて被災地へ向かいました。学生代表として山田さん、木村さん、そして「老祥記」「四興樓」「三宮一貫樓」の豚まんドリームチーム、計15名。1月17日を選んだのは、阪神淡路大震災を経験し、復興できた我々だからこそ、なんとか復興へのエールを送りたいという思いがあったから。

仙台空港に降り立った一行は、まず、車で被災地を見て回りました。未だ何もない土地が広がっており、まるで荒野のよう。初めて自らの目で見た大震災の脅威に愕然とし、「果たして被災者の方たちは喜んでくれるのだろうか」と不安になりました。しかし、それは杞憂に終わったのです。

訪れたのは、仮設住宅2か所。真っ白な湯気を上げて蒸しあがった豚まんとポラロイド写真を貼ったコルクボードに、瞬く間に大勢の人が集まってくれました。

木村「みなさんすごく喜んでくれました。いろいろな話もできたし、『神戸で震災があったとき、自分たちは何もできなかったのに、わざわざ来てくれて本当にうれしい』って言ってもらったのが心に残っています」。

山田「実は、自分が被災地支援のために何かをすることが偽善的な気がして、それまではボランティアに参加できなかったんです。『俺が役に立つんか？自分がボランティアしたって自己満足で終わるんちゃうの？』って。でも、おばあさんが『ありがとう』って涙ぐみながら言ってくれたり、そんなにうれしいの？っていうくらいはしゃいでる子がいたりして…喜んでもらえたことを実感した瞬間、『あぁ、来て良かった。答えは簡単やった』って思えたんです」。

山田さん、木村さんを被災地へと動かし、温もりを届けることができました。そして、この貴重な経験は、2人の人生観を確かに変えた出来事となったのです。これが、“西村教授のマーケティング論”が持つ魔法の力なのです。



次に、僕が被災地のために何ができるかということは正直まだ分かりません。でも、今回のことを自分のなかのイベントで終わらせたくない気持ちです。就職が決まっているインナーウェアのメーカーも被災地支援を行っているので、自分なりにいろいろ考えて取り組みたいです。

右: 経営学部 経営学科
4年次 **山田 桂司**さん

西村ゼミで学んで、社会のさまざまなことに興味や課題意識をもつようになりました。僕は損害保険会社に就職が決まっているのですが、被災地で“保険の大切さ”を実感したので、お客さんの目線を仕事に生かしていきたいです。

左: 経営学部 経営学科 4年次 **木村 彰**さん

知能情報学部コミュニケーションロボットプロジェクト

ロボットが漫才をする!?

かつてSFの小説や映画に登場し、私たちにとって“未来”の象徴のような存在だったロボット。今では産業界を中心にさまざまな分野で活躍するようになりました。最近では、ペット型ロボットやお掃除ロボットなども現れ、私たちの身近なパートナーとして存在感を高めています。そんな中、知能情報学部がコンビで即興漫才をこなすという、驚きのロボットを開発。マスコミからも注目を集める「漫才コンビ」の実像に迫ります。



イベントの話題をさらった異色の漫才コンビ！

「イチロー、11年連続200安打ならず」
「イチローて誰かわかっとんけ？」
「わかっとるわ!!ニューヨークブルックリン区出身、48歳の…」
「それイチローやなくってマイケル・ジョーダンやないか！」
「まあ、軽いジョーダンや」…

昨年12月、「ビジネス・エンカレッジ・フェア2011」が開かれた大阪国際会議場（グランキューブ大阪）には、来場者の楽しそうな笑顔と「ほーっ」という感嘆の声が響いていました。彼らの視線の先に立っていたのは、2台のコミュニケーションロボット。軽妙でとぼけた味わいの漫才を関西弁で見事に披露しています。丸みを帯びたフォルムが愛らしいお笑い界のニューフェイスは、ツッコミ担当の「i-1（愛称・あいちゃん）」写真左」とボケ担当の「i-2（愛称・ゴン太）」写真右」。実は、この漫才コンビこそ、甲南大学知能情報学部の中山弘隆教授を中心とする「コミュニケーションロボットプロジェクトチーム」の高度な技術と研究成果を生かして社会貢献したいという想いの結晶なのです。

スポーツから芸能までお任せ！即興漫才のネタはウェブサイトから。

展示会では、あいちゃんとゴン太の話術もさることながら即興ならではのネタの新しさと幅広さが大きな注目を集めました。

「ロボットが漫才する。しかも、即興で!?」という意外性が人々の心をとらえたのかもしれません。それにしても即興という難易度の高い漫才が、なぜロボットに可能なのでしょう？その鍵は、ウェブニュースから台本を自動生成するシステムにありました。あいちゃんとゴン太には、あらかじめ漫才の基本的な構成がプログラムされており、特定のウェブニュースを指定すると、そのニュースのタイトルや本文などから、キーワードとなる単語を取り出し、台本を自動的に完成させ、ウェブニュースをネタにした冒頭のような漫才を展開します。“この文章の主人公は誰か？”“どの単語が重要なのか？”ということもロボット自身が考えて答えを出し、大まかに内容を要約する能力まで備えているのです。

冒頭に紹介したイチローをマイケル・ジョーダンと勘違いする“ボケの仕組みも、タイトルや本文から“イチロー”という主人公の名前を抽出し、“Yahoo!人物名鑑”から関連性の高い人物を探し出すことによって生まれたものです。さらに“それイチローやなくってマイケル・ジョーダンやないか！”とつっこむ、あいちゃんの怒ったような目の表情も見逃せないポイント。会話の流れに応じてハートが飛んだり、涙目になったり、音符が流れたりとFlashを用いた目の表情の豊かさもまた、軽妙な漫才に生き生きとしたアクセントを添えています。

「つかみ」「本ネタ」「オチ」正統派漫才の構成も魅力。

あいちゃんとゴン太の漫才の魅力は、その即興性だけでなくシンプルながらしっかりとした構成にもあります。それは、伝統的な漫才にのっとった「つかみ」「本ネタ」「オチ」からなる三段構成。たとえば冒頭に紹介した漫才では“いやー、ひさびさの地球だなあ”“ほんまやなあ”“もう地球は12月でクリスマスのシーズンやな”“おっ－地球のこと、ちょっとはわかっとるやん”という具合に二人の掛け合いからスタート。この「つかみ」の部分はあらかじめ決まったシナリオにのっとってはいますが、季節に合わせて変わる内容と少しとぼけた味わいのある声が観客を漫才の世界へ引き込みます。

その後、漫才は最大の見せ場である「本ネ





タ」へと展開。このパートでは、イチローをマイケル・ジョーダンに勘違いするといった人名の勘違いのほかに、韻を踏む(よく似たことばと間違う)ボケもゴン太の得意技として披露されます。このボケも、当然ながら漫才自動生成システムによるもの。ウェブニュースの本文から取得した一般名詞をローマ字変換し、登録辞書の中から母音の並びが同じ一般名詞に置き換えることによって生まれています。

さらに漫才の「オチ」にもチームのこだわりが込められています。ゴン太が「タイムリーヒットとか、ぜっタイムリー(絶対無理)!」とイチローらしく野球にからめたダジャレを言い放つと、「もうええわ!」とあいちゃんが冷たくあしらう…。誰もが思わずクスッと笑ってしまう展開は、「本ネタ」と同じく漫才自動生成システムによって可能になりました。頻出度が高い単語をもとに関連性が高いジャンルを推定し、あてはまるギャグをランダムに抽出することによって生まれるオチの数々。「ぜっタイムリー!」という脱力系ギャグもまた、まぎれもなく教員と学生たちによる、知能情報学部の学びを生かした〝技〟なのです。

〝人々の心を和ませる〟ロボットを。これぞ甲南らしい学び。



知能情報学部に「コミュニケーションロボットプロジェクトチーム」が誕生したのは、今からおよそ3年前のこと。「学部の学びを分かりやすく紹介する方法はないか?」。2008年に開設したばかりの知能情報学部のPRと、高校生の理系離れに歯止めをかけるべく、中山弘隆教授の呼びかけに応えて、灘本教授、北村准教授、永田講師など各分野のスペシャリストたちが立ち上がったのです。このとき、プロジェクトチームが目標として掲げたのは、「人々の心を和ませ、癒せるコミュニケーションロボットを作る」こと。それは「動き」や「機能」にばかりに関心が集中しがちなロボットに、「温かみ」と「親近感」を与えるための果敢な挑戦でもありました。この夢を共有し、先生方の熱意に触発された学生たちも研究室の垣根を越えて続々と参集。知能情報学部が柔軟な組織であるからこそ可能となった「ドリームチーム」の誕生でした。また、この研究が果たす教育的役割が高く評価され「甲南大学父母の会・学生GP」(本誌No.40 P12〜14で紹介)による助成金の交付も決定。創立者の「学びを生かして社会に貢献する」理念、研究室などの垣根を越えて力を合わせる姿勢、それを支援してくださる父母の会:すべてが甲南大学らしいあたたかみのある取組みがスタートしたのです。

その後の研究開発は、周囲も驚くほどの急ピッチで進みます。2009年のオープンキャンパス(受験生のための大学見学イベント)には「早くも」あいちゃん(ver.1)」が登場。このときすでに質疑応答システムを装備し、甲南大学を初めて訪れる高校生たちを出迎え、質問に答える愛くるしい姿が注目を集めました。たとえば、「ロボット研究をしている先生は誰ですか?」と尋ねると、該当する先生方の名前を的確に回答してくれたのです。キャンパスでの思わぬ最先端ロボットとの遭遇に、高校生たちは大興奮。あいちゃんの周りには常に人だかりができ、目を輝かせながら矢継ぎ早に質問する人や、親しみを感じて触ろうとする人などが続出。このように予想をはるかに超えた熱い反応を目の当たりにして、チームのメンバーが感じたのは自分たちの研究に対する確かな手ごたえでした。そして、「即興漫才ができるロボット」の開発へと新たな一歩を踏み出したのです。

チーム全員の思いが重なり、漫才ロボットの形が見えてきた。

プロジェクトチームの次なるテーマは「ロボット同士の自然な会話」でした。当時、すでにあいちゃんは、人間の呼びかけに応じてあいさつを返す、時刻を教える、特定の質問に答える、しりとりをするといった諸機能を備えていました。しかし、ロボットとロボットに会話をさせると、どうもぎこちない。いかにも機械といった不自然さが拭えず、メンバーたちを悩ませました。「これでは人の心を癒すどころか、聞き苦しくて仕方ない」。私たち人間にとってごく当たり前の「会話」。それをロボット同士に自然な感じでさせるためには、たくさんの課題をクリアしなければならなかったのです。「どのような会話をさせるのか」ということから始まり、「会話全体を統括するシステムをどうするか」「お互いの会話における『間』や『受け答え』をどのようにコントロールするか」「会話に応じた2体の足回りを自然に制御する方法は?」…などなど、たくさんのハードルが立ちふさがりました。しかし、教員と学生が一丸となり、一つひとつを確実に突破していきました。

しかし当時、数々の難題を前にしてもチーム内には常に明るい雰囲気が流れていたといいます。すでに「ロボットによる即興漫才」という確固たる目的を共有していたからでしょうか。誰もが楽しめる漫才だからこそ、「人の心を和ませ、癒すコミュニケーションロボット」のさらなる可能性が探れるに違いない。そして、ロボットと漫才という意外な組み合わせが、大きなインパクトを与え、「理系離れ」を食い止めるきっかけになるかもしれない。そんな情熱が、中山教授をはじめとしたチーム全員に共有されていたのです。

一方、ウェブニュースを元にした漫才自動生成システムを手がけた灘本教授は、このロボットにもう一つの役割も期待していました。年齢や環境、視覚障害などによってウェブニュースにアクセスできない人たちが、ウェブニュースから生成した漫才に興味をもってもらうことでデジタルデバイド(パソコンやインターネットを使える人と使えない人との間に生じる格差)を克服するきっかけを作りたい。そんな未来への願いも乗せて、日々、地道な研究が続けられました。



最新技術を融合させる困難を乗り越えて。

研究は「漫才」という楽しげな響きとは裏腹に、異なる技術を融合させる困難との戦いでもありました。即興漫才を可能にする漫才台本自動生成システムの開発、ロボット間通信の構築、音声認識ならびに音声合成の技術、スムーズな移動ユニットの構築、さらに温かみを表現するロボットデザインなど、エキスパートたちがそれぞれの高度な知識と技術を発揮、結集するとともに、共通に思い描く「理想の漫才イメージ」を実現するため、緻密な検討が重ねられたのです。学生たちもまた、意見を出し合い、絶妙なチームワークで完成をめざしました。その努力が実り、冒頭で触れた昨年12月の「ビジネス・エンカレッジ・フェア2011」で披露されて以来、あいちゃんとゴン太の漫才コンビは、新聞社やテレビ局などから問合せが殺到するほど注目を集めています。

2台のロボットによるほのぼのとした漫才は、子どもたちから大人まで、多くの人を驚かせるとともに、その心を和ませてくれることでしょう。いずれ、あいちゃんとゴン太が高齢者福祉施設や児童福祉施設などを訪問し、漫才を披露する日が来るかもしれません。ロボットが取り組むあたたかな社会的貢献に、学内外の期待が高まっています。

社会のあらゆる場所で活躍するロボットをめざして。

プロジェクトチームのメンバーは今、さらに高度な漫才をめざして開発に乗り出そうとしています。"笑い"や「ユーモア」は、人間の極めて繊細な知的活動。その知能の世界に真っ向から挑戦しよう。そんなチャレンジ精神がメンバー全員で新たに共有されようとしているのです。たとえば、データ工学や自然言語処理技術を駆使して、より複雑な漫才台本を自動生成すること。漫才の内容によって即座にツッコミを入れたり、しばらく間を空けてみたり…いわゆる「絶妙」とされる漫才の『間の妙味』を音声認識・情報処理技術によって表現すること。さらにロボット自身がアドリブを交えながら自由自在に漫才をしたり、観客とリアルにやりとりをしたりとプロジェクトチームのめざす目標を数え上げればきりがありません。"笑いのわかるロボットをめざそう!"「冗談交じりに語り合う表情からは、知覚情報処理や感性情報処理、人工知能など知的情報処理を専門とするメンバーたちの誇りとあくなき好奇心が伝わってきます。



さらに、その挑戦は漫才の高度化にとどまりません。自己位置推定や画像処理などの最新技術を生かして、より広範な分野で活躍できるコミュニケーションロボットの開発も視野に入れているのです。これらの技術が完成すれば、目的地まで誘導した後に自分の力だけで元の場所に戻ることができる「案内ロボット」や不審者を発見後ただちに通報してくれる「警備ロボット」の登場も現実のものになるでしょう。そう遠くない将来、甲南大学のキャンパスはもちろん全国各地の公共施設やオフィス、家庭などで颯爽と活躍するあいちゃんとゴン太、その弟や妹たちが、みなさんとお目にかかる日がくるかもしれません。

Member interview
プロジェクトメンバーへのインタビュー



コミュニケーションロボットプロジェクトの発足以来、メンバーの先生方のご尽力をはじめ、知能情報学部の先生方には色々とご協力をいただきました。学生たちも開発段階からデモンストレーションまでをトータルに体験し、人間としても大きく成長したと頼もしく感じています。「甲南大学 父母の会」のご支援にも心から感謝しています。



中山 弘隆 教授(応用システム工学、知能情報処理)

書き言葉で書かれているWebニュースからユーモアを交えた対話文を自動で生成することは大変難しい技術です。しかしながら関西という土地柄、学生が「漫才」に興味を持ち、大変意欲的にこの難しい問題に取り組んでくれました。



灘本 明代 教授
(データ工学、Webコンピューティング)

チームのメンバーと試行錯誤しながら作り上げる喜びが味わえました。学生・院生諸君は、コミュニケーション力を養う貴重な機会にもなったことでしょう。



北村 達也 准教授
(音声・音響情報処理)

学生諸君の頑張りで、「見る、聞く、話す」という知能を集結したコミュニケーションロボットが実現して嬉しく思います。今後の更なる発展にも期待したいです。



永田 亮 講師
(計算言語学、自然言語処理)

ロボット製作には、幅広い分野の高度な技術力と知識が求められるもの。完成させた学生・院生は自信を持ってほしいですね。



宮崎 光二 講師
(知能情報処理)福山大学 工学部

さまざまな技術などを試行錯誤し、目標に向かい協力して物を創りあげていくことは大変に困難かつエキサイティングな知の大冒険であり、院生・学生諸君のこれからの人生に必ず役立つことでしょう。



篠田有史 講師
(甲南大学情報教育研究センター)

プロジェクトの初期から開発に携わり、チーム全員をまとめるという大変ですがやりがいのある経験をさせていただきました。



宇野 侑希さん
自然科学研究科情報システム工学専攻 修士課程2年次

音声関係を担当しました。オープンキャンパスや学外の展示会で多くの人に驚きと感動を与えられたことは、今後の自信につながります。



田中 聡さん
自然科学研究科情報システム工学専攻 修士課程2年次

主にセンサーと移動制御を担当。開発プロセスのすべてが新鮮な発見の連続でした。濃密な3年間が過ぎたことに達成感を得ています。



伊藤 洸さん
自然科学研究科情報システム工学専攻 修士課程2年次

ほか、知能情報学部 荒木孝哉さん、喜野孝太さん、堀恵輔さんもプロジェクトメンバーです。※情報システム工学専攻は2012年4月より名称を「知能情報学専攻」に変更します。

○あいちゃんとゴン太の漫才は「日刊工業新聞社サイト ロボナブル」にて動画でご覧いただけます。http://www.robonable.jp/news/2012/01/konan-0117.html

甲南学園創立90周年記念事業

平生釟三郎日記 刊行記念シリーズ

平生釟三郎とスペイン・インフルエンザ

経済学部准教授・医師
後藤 励

スペイン・インフルエンザの流行

インフルエンザは、流行性のウイルス感染症である。通常、12月頃患者が出始めるが、年末年始の人々の移動により感染機会を増やした後、学校が始まる1月10日頃本格的な流行が始まる。特に、2009／2010シーズン、新型インフルエンザと一般に呼ばれるH1N1ウイルスが流行したことが記憶に新しい。これと同じH1N1ウイルスがヒトに大流行したのは、1918年から1920年にかけてである。

感染がどこから始まったかには諸説あるが、アメリカ中西部の兵営で1918年の3月に始まったという説が有力である。兵士が第1次世界大戦の戦場に移動するにしたがって感染は広がり、早くも4月にはヨーロッパでの患者が増加した。スペインでは5-6月の間に大流行したが、患者は多いものの死者は少なく300名程度であった。フランスやイギリスでも同時期の流行はあったが、戦時下の情報管理のため不幸にもスペインでの流行のみが世界的なニュースとなった。以後、このインフルエンザはスペイン風邪（病原体がわかってからはスペイン・インフルエンザ）と呼ばれるようになった。

1918年春の小流行は、日本ではほとんど報道されていない。平生釟三郎日記（以下日記）でも4月から7月にかけて、米軍の派兵増加など西部戦線の状況について詳細に書かれているがインフルエンザに関する記述はない。

日記にスペイン・インフルエンザについての記述が初めて現れるのは、1918（大正7）年10月23日である。「世界ノ各方面ニ流行セルスパニッシフヒーバー」として、休校した小学校があることを書いている。人口に対する死亡率を見ると、京都・大阪・神戸の三都市は、東京や名古屋などを上回っており、最大の被害地であった。しかし、流行の特徴は、患者に対する死亡率（致命率ともいう）がそれほど高くなかったことである。この日、平生は後世のデータから見ても正確に、外国における致命率5%に対して、我が国のものはむしろ軽症で、肺炎を併発して亡くなるものもいるが例外的である、と書いている。

家族と社会に対する冷静な視点

とはいっても、インフルエンザにかかる率は高かったため、患者数も死亡者数も多かった。平生本人も11月18日悪寒と発熱の症状があったが、犠牲者の多くが軽度の発熱と病の初期に注意を怠ったことに注目し、慎重にも終日自宅安静を行っている。

最終的に平生家では、使用人や書生を含めた21人の家族中19名がこの病気にかかった。幸運にも全員が入院することもなく11月21日には軽快した。このことを祝い11月25日赤飯を炊き全員で会食をしている。この際平生自身が互いの看病の労をねぎらう言葉を述べている。

全国的に見ても、1918年11月をピークに死亡者数は減少に転じ流行は収まったかに見えた。しかし、1919年12月から1920年1月にかけてまたもやインフルエンザの流行が日本を襲った。1918／1919シーズンの流行を前流行、1919／1920シーズンの流行を後流行と呼ぶが、後流行が前流行と違う点は、罹患率は低いものの致死率が高いことである。

後流行期のインフルエンザに関する記述は、家族知人の病状に関するものに加え社会全体に関するものが多い。1920年1月9日には、この年の流行性感冒について、医学者の間でも原因や治療法に関するまとまっていないとしたうえで、前回流行した時に感染したもので今回は感染しないものが多いことを考えれば、「免疫性ナルコト明カナルガ如シ」とし、経験医学上の仮説を提示している。

こうした病気に関する科学的な視点も一例ではあるが、後流行期の記述は、インフルエンザに襲われた社会に対して非常に客観的である。新聞の死亡広告を詳しく読んで、一人の死去に対する複数の死亡広告や複数の段を使ってする大々的な広告に気づいた平生は、「大戦ガ我国民ニ与ヘタル奢侈心、軽浮心如此キ結果ヲ生ズルに至リタルコト、実ニ慨嘆ノ至ナリ」（1920年1月16日）と記している。また、富豪の家族であって予防や治療に手を尽くしても病に倒れるものが多く、病魔が決して貧乏人ばかりに危害を加えるものではないと考え、久原房之助に「病気ハ実ニ衡平無私ニシテ尤モデモクラチックナリ」と語ったところ苦笑された（1920年1月13日）とある。

ウイルスが原因ともわからず、根本的な治療・予防のない当時、スペイン・インフルエンザは恐ろしい病であっただろう。しかし日記では、家族に対しては病状を観察し適切な指示を与え、社会混乱を客観的に見るという、平生の冷静沈着な視点が貫かれていた。


1918年当時の平生釟三郎

『平生釟三郎日記』第一巻～第四巻を刊行しました。



『平生釟三郎日記』第一巻～第四巻を刊行しました。定価は各巻20,000円（税抜）ですが、甲南学園関係者の方（卒業生、在学生、ご父母、教職員等）は、10,000円（税抜）でご購入いただけます。

ご注文・ご購入に関するお問い合わせ
甲南大学生協書籍部 Tel.078-441-7901 Fax.078-441-7915

【参考文献】 Zimmer SM, Burke DS. Historical Perspective — Emergence of Influenza A (H1N1) Viruses. New England Journal of Medicine 2009;361(3):279-85.
速水 融（2006）日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 藤原書店.

オール甲南夢舞台

●13:30~16:30 無料

同窓会がお招きしたゲストミュージシャンとプロもうならせるほどの実力を持つ学生生徒の共演！誰もがご存知の、一緒に歌っていただける曲をご用意いたします！元気になるコンサートをお楽しみください！

出演：JAZZ研究会、グリークラブ、吹奏楽部、中高プラス

理工学部　田中 修 教授講演会

「花と緑のふしぎ2 ～役に立つ植物たち～」

●12:00~13:30 無料

2008年度のオール甲南の集いでご好評いただいた、田中教授の「花と緑のふしぎ」。2012年度は、同じタイトルのもと、「私たちの役に立ってくれる植物たち」の話をご披露いたします。

小原流こどもいけばな教室

●13:00~16:00 入替制 ※整理券配布

日本3大流派の小原流の五世家元は甲南中・高・大のOB！そのご縁から実現したプログラムです。※家元ではなく、小原流の先生方による教室です。

経済学部開設60周年記念講演会

OB経営者と語る「地域から発する“元気社会日本への道筋”」

●14:00~15:30 無料

講師：西河紀男氏（S33経済学部卒：三ツ星ベルト株式会社会長）、水野正人氏（S41経済学部卒：東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会専務理事）、川喜多佑一氏（S43経済学部卒：モロゾフ株式会社会長）、平川昌紀氏（平成5年経済学部卒：株式会社きちり社長）

カラフルなキャンドルをつくろう！

●13:00~16:00 無料 入替制 ※整理券配布

柔らかな灯火でお部屋を優しく照らすことで、ブームとなっているキャンドル。自分の手づくりキャンドルをつくってみませんか？

模擬店・物産展

●12:00~16:00

毎年ご好評いただいている模擬店。卒業生が経営する企業・商店などの物産や軽食、ビール、綿菓子、スナック類などをお得な価格でご提供！

どなたでもご参加いただけます！

スタンプラリー 賞品

スタンプを集めて賞品をゲットしてください！

雨天でも開催いたします！







オール甲南の集い 2012

5月20日(日) 12時～ 場所：甲南大学岡本キャンパス

毎年恒例の「オール甲南の集い」。本年も幅広い年齢層の方にお楽しみいただけるようさまざまなプログラムをご準備いたします。どうぞ、ご参加、ご協力賜りますようお願い申しあげます。

※内容は若干変更する可能性がございます。4月下旬よりオール甲南の集い特設HP（http://www.konan-u.ac.jp/all-konan2012/）を開設します。最終的なプログラムはそちらでご確認ください。

憩いの広場

●12:00~16:00 無料

茶華道料理部道心会の学生によるお茶・お料理でくつろいでいただきます。

記念写真撮影コーナー

●13:00~16:00 無料

大学校舎をバックに、写真部が記念写真をお撮りします。

フラワーアレンジメント教室

●13:00~16:00 無料 入替制 ※整理券配布

プロがお教えします。マスターしてあなたのお部屋に素敵なフラワーアレンジメントを飾りませんか？

キックターゲット

●13:30~16:00 無料

甲南大学がオフィシャルスポンサーを務めるヴィッセル神戸提供の大人気ゲーム！ヴィッセル選手のサイン入りグッズなど、素敵な賞品をゲットしてください！

ミニサッカー大会

●9:30~16:00 無料

親子でフットサル！飛び入り参加も大歓迎です！！

お祭り広場

●12:00~16:00

無料 賞品

射的、バルーンアートなど、子どもさんが楽しめるゾーンです！

お問い合わせ先／甲南学園広報部 TEL.078-435-2314

※学内は全面禁煙となっております。※駐車場はございません。電車・バスをご利用ください。

主催／甲南学園　協賛／甲南学園同窓会・甲南大学生活協同組合・岡本商店街振興組合

キリトリ

甲南Today読者限定の

特典チケット

このチケットを5号館1階カフェ・パンセにてお渡しください。お好きなドリンク（コーヒー・紅茶・オレンジジュース）とお引き換えいただきます。

2012年5月20日（日）
オール甲南の集いにおいてのみ有効



将棋盤で繰り広げられる戦いの中にある無数の定跡を踏まえ、その一手を読む。

1984年同好会として産声を上げた甲南高等学校・中学校の将棋部は、数々の大会で目覚ましい戦績を収めるまでに成長しました。今回は、その躍進を部長として支え、昨年の近畿高等学校総合文化祭で宿敵である強豪・灘高生を破って見事、優勝を果たした中 拓海さんをクローズアップします。

「甲南の将棋部でいっしょに戦おう！」先輩の一言が背中を押した。

『将棋のどんなところが好きですか？』こう質問すると、「将棋を指している、その戦略の駆け引きが好きなんです。自分より強い人と指すのは楽しいですね。自分の知らないことや想定外のことが発見できるので」中さんは落ち着いた口調で答えてくれた。



彼と将棋との出会いは小学校4年生の授業。「ちょっと強いかも？」自分でもそんな感覚が出てきたとき、アマチュア初段の友達に大敗した。そのときに味わった悔しい思いから、その友達に誘われて将棋クラブに入部した。「初心者の頃が一番上達できますね。同じ局面をむかえても違った見方ができるから」当時のことを振り返り、中さんはこう話してくれた。上達は決して早いほうではなかったけれど、棋書を読んだり、詰将棋をして終盤の練習をしたり、棋譜を並べていろんなパターンの将棋の指し方を研究したり、将棋教室にも通い始めた。中学校に通う頃には席料を払って将棋会館へ通うまでに没頭し、中学3年生の時には道場の規定で最上段となる六段まで昇級していた。甲南高校へ進学したきっかけは、将棋会館で出会った甲南高校の先輩からの誘いがあったから。「甲南の将棋部で、団体戦にいっしょに出よう」その言葉が、進路を決定する『一手』となった。

中さんに将棋が与えたモノとは？

甲南高校へ入学してからは、各種の大会に向けて将棋を取り組むようになった。オンライン上の試合で実戦を積み、大会前には将棋会館で10局もの棋戦をこなし、一日過ごすこともある。こういった日々の努力が実を結び、数々の大会での優勝など輝かしい戦績を収めている。そんな中さんが将棋から得たモノとは？「目標を持って過ごせるようになりました。将棋に出会っていなかったら、何も考えずにふつうに過ごしていたと思います」我慢強く、あきらめなくなった。でも、集中力は無いと言う。「調子に波があるんです。大勝負で負けると一週間ぐらい将棋を指さないことはしょっちゅうです（笑）」



甲南高等学校　三年C組
中 拓海さん

4月には甲南大学経営学部へ進学し、高校時代から交流のあった文化会囲碁将棋部へ入部を希望している中さん。「大学では、団体戦で好成績を残したいです」将棋をやっているときが一番楽しい－将棋の形勢にたとえると、中さんはまだ序盤、将来の進み方も無限の方向がある状態といえる。今後、中盤・終盤の『自分』という駒をどのように進めるのか、楽しみである。

華やかな戦績は、地道な努力があってこそ。
さらに棋力を磨き、勝利の原動力になってほしい。

中君は序盤でリードを奪い、優位に展開する棋風の持ち主です。この方法で勝利を得るには、新旧の定跡に対する豊富な知識が不可欠。輝かしい戦績は、人一倍努力した結果に他なりません。大学でもさらに棋力を磨き、勝利に貢献してくれることを期待しています。

小さな任意団体として発足した将棋部も、今では強豪の一角に名を連ねるまでに成長しました。将棋部を目標に入学する生徒も増え、喜びと責任を感じています。今後も甲南大学将棋部やOB会の皆さんと連携し、幅広い年齢の方々との対局を通じて生徒たちの人間的成長も図りたいと考えています。

将棋部顧問　塩見 恵介 教諭



＜中 拓海さんの主な戦績＞

兵庫県アマ王位戦優勝（2010.8）、朝日アマチュア将棋名人戦近畿ブロック大会優勝（2011.11）、第1回高砂駒桜杯争奪戦（レーティング大会兵庫県予選）優勝（2012.1）など、高校将棋界の枠を超え兵庫県のアマチュア将棋界を代表する選手の一人。

ノーミュージカル、ノーライフ。生まれたときから歌やダンスがそばにいた。

甲南中学校に、劇団四季ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』に出演している生徒がいます。
13歳の少年ながら、大きな存在感を放つ池本淳宏さん。
学業と舞台、その両方に懸命に取り組んでいる彼が、自身の今と未来を語ります。



甲南中学校 1年c組
池本 淳宏さん

劇団四季ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』（大阪公演）は、歌で人々を励まし続けてきたトラップ・ファミリー合唱団の実話を基に、アルプスの雄大な風景を再現した舞台。家族愛と平和への希求を描いています。

歌とダンスのDNAが目覚めた瞬間から舞台に立つことを夢見ていた。

気がつけばいつも、歌やダンスがそばにいた。お母さんは元タカラジェンヌ。僕が小学校に上がるころから、歌やダンスを教えてくれた。自分の口からメロディが流れていく喜びを知った。曲には心があって、それを体のすべてで表現するのはとても楽しい。お母さんはよくミュージカルにも連れて行ってくれた。舞台の上で光を浴びるスターたちはとてもまぶしく、心が揺さぶられる気がした。

ついに訪れたビッグチャンス。全力をぶつけることが僕流。

そしてあの日、心に決めた。『夢から醒めた夢』という劇団四季の舞台を初めて観た帰り道。「僕もミュージカルに出たい」10歳だった僕にとって、どうしてもかなえたい夢ができた。

夢に向かい、地元の教室と自宅でレッスンを重ねる日々。あるときチャンスは訪れた。劇団四季『サウンド・オブ・ミュージック』で、主人公の家庭教師マリアと心を通わせていく少年フリードリッヒ。そのオーディションに挑戦することに。中学生になる直前、まだちょっと寒い春の初めだった。

審査には僕の苦手なハーモニーもあった。とてもうまい子がいたし、僕は何度も歌い直しをさせられたからダメかなと思ってたけど、全力を出し切ったので気持ちはすっきりしていた。結果は：何と合格！－「フリードリッヒになれるかも！」夢に向かって第一歩を踏み出した瞬間だった。

秋の初日に向けて、中学1年の夏休みは稽古に明け暮れた。「場面の中の気持ちの切り替えが甘い」などのダメ出しが何度もあった。僕は、注意されたことをなかなかうまく直せないタイプだけど、もっともっと上達したいから、落ち込む気持ちにもならないほどがむしゃらに取り組んだ。

そして迎えた本番。幕が開いた瞬間、出番を待つ僕の耳に歓声が届き緊張がピークに達した。いよいよ出番だ！ライトが眩しくて、客席は暗くて見えない。でも、自分の演技に集中することができ、僕がいちばん自信のあるソロパート「So Long, Farewell（さよなら、ごきげんよう）」では、のびのびと歌えたと思う。

プロとしての自覚と責任感が芽生えた今、夢はさらにその先へ。

すでに、フリードリッヒとしての舞台は50回を超えた。でも、まだダメ出しをもらう。二度と同じ注意をされないように、指摘されたところは猛特訓して直す。ひと口に“喜び”や“怒り”といってもその表現方法はたくさんあって、いろいろな演じ方を自分なりにノートに書いて練習をしている。体や喉のコンディションはいつもいい状態でいたい。ご覧になったお客様をがっかりさせたくないし、他の出演者の方たちにも迷惑はかけられない。

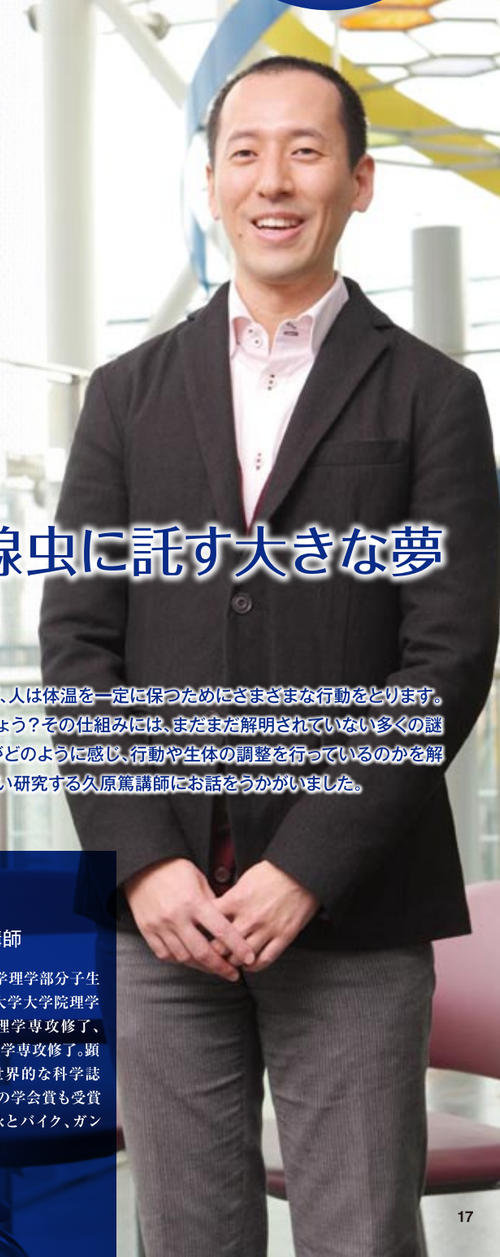
甲南中学校は大好き。仕事で出られない授業のノートを貸してくれたり、舞台を観て「最高だったよ」と言ってくれるいいともだちや優しい先生方がたくさんいるから。

劇場へは、必ずお母さんが来てくれる。お母さんは、僕の歌や演技についてとても厳しくて、お父さんはいつもほめてくれる。お兄ちゃんは何も言わないけど、応援してくれていることが分かる。家族のみんな、ありがとう。先生や友達、家族にもいつか恩返しがしたい。舞台を通じて、感動だけではなく元気や勇気、生きる喜びを届けられたら。そう願って、夢に向かい努力していきたい。



なるほど!
甲南アカデミア

先生!
知の最前線を
教えてください



わずか1ミリの線虫に託す大きな夢
ー地球温暖化から

暑いときには汗をかく、寒ければ震えるなど、人は体温を一定に保つためにさまざまな行動をとります。では、人はどのように温度を感じているのでしょう?その仕組みには、まだまだ解明されていない多くの謎があるようです。温度などの環境情報を動物がどのように感じ、行動や生体の調整を行っているのかを解き明かすために、線虫という小さな生き物を用い研究する久原篤講師にお話をうかがいました。

理工学部　生物学科
久原 篤 講師

理学博士、1999年名古屋大学理学部分子生物学科卒業、2001年名古屋大学大学院理学研究科博士前期課程生命理学専攻修了、2004年博士後期課程生命理学専攻修了。顕著な研究成果はたびたび世界的な科学誌に取り上げられるほか、多くの学会賞も受賞している。好きなものは水泳とバイク、ガンダム、それに中日ドラゴンズ。

プロローグ

いろいろな温度に適応できると快適!

【暑い!寒い!の悩みから解放される!?】

「高齢者のウインタースポーツ熱高まる!」「夏バテ知らずのお年寄りが急増」…などといった見出しが、新聞の一面を飾る日が来るかもしれません。まだまだずっと先の話ですが(笑)。

人間が温度などの環境情報を感じて身体を守る神経細胞の働きは、加齢とともに低下するといわれます。しかし暑さや寒さが苦手な高齢者が、温度を気にせずに1年中元気で快適に過ごせるとしたら、この新聞の見出しも夢ではありません。

このような未来をめざして、私は温度などの環境情報を動物がどのように感じるのか、暑さや寒さにどうしたら適応できるのか、といった感覚情報処理や生体適応などの仕組みを解き明かそうとしています。

【生きるために体温調節】

ご存知のように動物は、体温が一定に保たれている人や鳥などの恒温動物と、体温が環境によって変化する変温動物の2種類に分かれます。しかし、恒温動物でも、体温は常に一定に保たれているとは限りません。暑ければ汗をかいて熱を放出しようとするし、寒ければ体内で熱を作りだしたり、暖かい衣服を身に着けたりします。体温を快適な温度に保とうとする行動は、実は変温動物も同様で、暑いときは日陰に入り、寒いときには日向に出て体温調節をしています。動物はすべて、それぞれに合った一定の体温を保つために、行動しているのです。それだけ温度は命に直結する大切な情報であり、温度感知の仕組みの解明は、生き物の生命にかかわる重要な課題だといえます。

【遺伝子が温度を伝えている】

動物は体の表面、皮膚に張りめぐらされた神経細胞で、まず最初に暑い・寒いといった温度情報を感受します。その情報を受け取った神経細胞は、となりの神経細胞へと、次々と情報を渡していきます。情報のリレーのようなものですね。そしてゴールとなる脳に届くことによって、私たちは温度を感じることができるのです。

温度を感じる仕組みは、すでに多くの研究者が研究していますが、さらに私の研究では、神経細胞の中で温度を感じるときにはたらく新しい"遺伝子"があることがわかってきました。すべての細胞は、主に水とたんぱく質などからできていまして、細胞の中にある遺伝子はたんぱく質をつくります。つまり、「温度を感じる遺伝子」=「ある特定のたんぱく質」が温度の感知にかかわっていることを発見したのです。

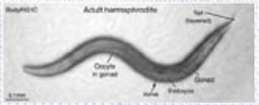
チャプター1

快適環境を学習する遺伝子

【人と遺伝子が類似する線虫】

研究では、実験動物として「Cエレガンス」と呼ばれる線虫を用います。線虫はわずか1ミリほどの小さな生き物で、土の中や海の中などにいます。寄生虫も線虫の一種で、実は私たちの身の回りにたくさん生息し、地球上の動物種の中で最も多いといわれています。

線虫を用いる理由は、細胞の数が圧倒的に少ないにもかかわらず、遺伝子の種類と数が人間と類似しているからです。人間の細胞が60兆個あるのに対し、線虫はわずか959個しかありません。そのうち302個が神経細胞です。人間の脳細胞は1000億個もありますから、圧倒的に少ない数ですよね。しかし、線虫の遺伝子の数は約2万個で、人間の遺伝子が約2万2000個ですので、それほど変わりません。このように、シンプルな生き物でありながら、人間に近い遺伝子をもっているため研究に適しているのです。実験に用いられるようになって歴史は浅いのですが、医学分野では研究が盛んで、すでに線虫の研究が人間のガンの治療にも使われるようになってきました。ここ10年において線虫を用いた研究により、6名もの研究者がノーベル賞を受賞している程です。

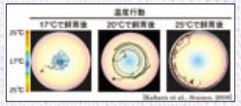


研究に用いる線虫「C.エレガンス」。約1ミリの体長だが、人間に近い約2万個の遺伝子を持つ。(人間は約2万2000個)

【温度走性の研究】

この注目度No.1の線虫は、温度に対して実に多様な行動を示します。研究ではまず、温度に対する行動である「温度走性」に着目しました。えさを与えられた状態で、なおかつ一定の温度で飼育された線虫は、違う温度環境に置かれても、もともと飼育されていた温度のほうへ向かいます。たとえば、17度の環境でえさを与えて飼育した線虫がいます。そのあとこの線虫を、17~25度の温度勾配のある環境に置きます。この場合、えさは与えません。すると、線虫は17度のほうへ向かっていきます。

この「向かう」行動が温度走性です。ここから線虫は、まず「温度の感知」をしているということ。そして、「17度=えさがある」と「記憶」もしていることがわかります。



線虫の温度行動
線虫は、17℃から25℃の温度勾配の上で過去に飼育されていた温度に向かう。

【線虫は学習して賢くなる!?】

さらに興味深いことに、線虫が環境について「学習」していることがわかりました。17度の環境かつ、えさの「ない」状態で飼育した線虫を、17~25度の温度勾配のところに置いてみます。この場合も、えさは与えません。線虫はどんな行動を示すでしょうか。17度を避け、温度の高いほうへ向かうのです。つまり、17度で空腹状態を経験した線虫は、17度の環境が嫌いになっていたのです。

「この場所は嫌だから違うところへ行こう」と、線虫は「学習」し、行動することがわかりました。このような線虫の行動の解析から、動物が温度を感じる遺伝子や、記憶や学習にかかわる遺伝子などが多数明らかになってきました。

【線虫が地震を予知!?】

これまでは温度に対する行動を見てきましたが、新たな研究の一つとして、動物の「磁気」の感知と応答行動についても調べています。大地震の前に、犬が激しく吠えた、ミミズが地上に這い出してきた、などといった話は昔からよく耳にするように、動物は磁気の影響を敏感に感じているのです。

線虫を用いた「磁気」感知の研究は進行中ですが、磁気を感じる遺伝子が見つかり、現在、その解析を進めています。将来的には地震予知につながるのではないかと、この研究でも、大きな期待と夢を抱いています。

エピローグ

発見の喜び-研究はやめられない

私の研究のモチベーションは、「発見することの面白さ」。誰も成し遂げたことのない研究を進めることは、決してたやすいことではなく、多くの時間を要し困難を乗り越える力が必要です。しかし、世界で初めての発見をしたときのインパクトと喜びは、何事にも変えられない大きな感動があります。

線虫を用いた研究成果が応用されることで、難病に苦しむ人を救うことや、温暖化が進む地球環境を救うカギになると信じています。実際に、新薬開発など企業との共同開発に携わる機会も多くあります。私の研究と企業のニーズやテクノロジーがマッチすれば、新しいものがどんどん生まれていくでしょう。未来の一端を担う誇りのある研究だと感じています。


美しいインテリアで飾られた研究室。「神経や脳の活動は環境にも影響されます。精神的に安らげる環境があってこそ、良い発想が生まれます」と久原講師は語る。

第一線で活躍する卒業生に、ご自身の生き方についておうかがいするこのコーナー。今回は、思わぬきっかけからカンボジアで孤児院運営に、奮闘されていらっしゃる女性を紹介します。

私は日本人。だけど、カンボジアの子どもたちの“お母さん”。



メアス 博子さん

和歌山県海南市に生まれる。1997年、甲南大学経営学部卒業。カンボジア人男性との結婚・出産を経て、2000年よりカンボジア・シェムリアップ州にある「スナーダイ・クマエ孤児院」にて管理運営の責任者となる。現在は13歳になる息子とともに、約25名の子どもたちと共同生活を送っている。

○スナーダイ・クマエ孤児院ブログ
「カンボジア　スナーダイ・クマエのブログ」…http://snadai.blogspot.com
○メアス博子のブログ
「いままでと、これからと　A day in my life」…http://tanosindoi.blogspot.com

虐待、強制労働、教育の大切さを知らない親たち。カンボジアの子どもたちを取り巻く環境。

夕日に赤く染まるアンコールワットの遺跡、豊作を喜び合う農民たち…。生き生きとしたタッチと鮮やかな色彩、その個性あふれる作品をご覧になれば、きっと感動していただけることでしょう。私自身も躍動感がみなぎる作品に、いつも励まされています。

この絵の作者たちはみんな、親から虐待を受けたり、学校に行かせてもらえず労働を強いられていたり、十分な養育を受けていない子どもたちです。私はこのような子どもたちを受け入れている「スナーダイ・クマエ孤児院」を運営しながら、現在カンボジアで暮らしています。

甲南大学の卒業を間近に控えた1997年、旅行で初めてカンボジアを訪れた際に、後に主人となるメアス・トミーと出会いました。彼は難民として来日し、中学校から大学院までの教育を日本で受け、母国であるカンボジアに戻って孤児院の建設に携わっていました。

翌年トミーと結婚し、息子を出産。孤児院が完成したのは1998年ですが、私自身は2000年から本格的に孤児院の仕事にかかわるようになりました。孤児院の名前である「スナーダイ・クマエ」とは、カンボジアの言葉（クメール語）で「カンボジア人の手によるもの」という意味です。カンボジア人が自らの手で子どもを育て、その子どもたちが自分たちの手で国をつくっていく、そういった希望が込められています。

ご存知のようにカンボジアでは、1975年からの数年間、当時の政府（ポルポト政権）によって多くの命が奪われるなど、国情が不安定な状態が続きました。子どもたちは教育を受ける機会を奪われ、空腹に耐えながら生きることだけを考えて大人になっていきました。このような凄惨な子ども時代を生きてきた人々がちょうど今の親世代で、自分の子どもに教育を受けさせる大切さを分かっていないんです。

また、この時期に行われた知識層の虐殺により、医療、技術、農業などすべてにおいてカンボジアの発展が遅れているといわれています。実際、現在においても国を動かすリーダーが不足しており、そのことはもちろん教育環境にも影響を及ぼし、子どもの成長を取り巻く環境は決して良いものとはいえません。こうした背景から、生活指導も含めた教育が受けられる、子どもたちのための施設として、孤児院が建てられたのです。私は子どもたちから「お母さん」と呼ばれています。なぜかそこだけ日本語で（笑）。



夜遊び、飲酒、喫煙、暴力…。問題だらけの子どもたちにどうすれば寄り添えるのか？

現在、孤児院には7歳から21歳まで、約25名の子どもたちが暮らしています。子どもたちには道徳観念がなく、衛生状態も良くありませんでした。夜遊び、飲酒や喫煙、無断欠席や暴力など問題行動も日常茶飯事で、学校に謝りにいくこともしょっちゅう。でも、そこを直すのが孤児院の役割なので、大変と思ったことはないんです。覚悟してましたし。「どうすれば子どもたちの心に寄り添えるのか？」。そればかり考えていましたね。私は子どもたちに3つのことを言い続けました。「嘘をつかない」「ものを盗まない」「一緒に暮らす人を大切に」。反発されても個性と受け止め、“虐待された子”として見るんじゃなく、一人の人間として向き合うようにしました。掃除・洗濯・食事の準備や後片付けなどのほか、畑や庭の手入れも共同作業で行いました。形として残るし、「みんなでつくったんやで」って思い出に残るように。



子どもたちは少しずつ変化してきました。学校をさぼってる子がいても、他の子は、これまでのように見て見ぬふりをするのではなく、私に相談するようになりました。「あの子が学校を卒業できなかったらかわいそう」と。「バレたら怒られる」ということではなく、「卒業できない」ということが問題だということが分かるようになったんですね。

現在は社会に出て、観光ガイドなどの職に就いている孤児院の卒業生が、“里帰り”をしてきて一緒に食事をすることがありますが、彼らの仕事に対する責任感、一緒に働く人への思いやり、誇りややりがいを感じながら社会人として自立している姿を見ると、私がこれまで積み重ねてきたことの結果に大きな喜びを感じます。

経済的自立と指導者の確保。真の“スナーダイ・クマエ”に向かって。

今後の課題としては、経済的な自立がひとつです。設立当初は支援金だけで運営していたのですが、あるとき、100%支援金で運営していくって危ないなと思ったんです。自分たちで何とかしないといけないと。そこで、2004年頃からオリジナルのTシャツの販売を始めました。孤児院を見学に来られた方に購入していただいていますが、最近ではカンボジアの土産店にも並べていただけるようになり、徐々に売り上げも伸びています。「スナーダイ・クマエ絵画展」の活動もそのひとつ。絵画展の大きな目的は、孤児院を支援してくださった人たちへの恩返しと、カンボジアという国や孤児院のことを知ってもらうということですが、もうひとつに、絵画などの販売による施設運営費のねん出があります。日本での開催を毎年続け、ようやくですが、施設運営費の約50%を自分たちで確保できるようになってきました。子どもたちも、自分たちが描いた絵が孤児院の運営資金になっているって分かっていて、“孤児院は、みんなで互いに助け合って生きている場所”だという意識ができてきました。

もうひとつの課題は、子どもたちを指導する良い人材をもっと増やすこと。卒業生が自分たちの体験をもとに学んだことを後輩に伝え、育てていけるようになることこそが、本当の意味での“スナーダイ・クマエ（＝カンボジア人の手によるもの）”につながると思います。



卒業後15年たっても私を支えてくれる甲南大学の“絆”。

2011年の絵画展は、私の母校である甲南大学の甲友会館で開催させていただきました。絵画展を支援してくださる会の会長や事務局長など、中心となるメンバーは私の友人であり甲南大学の卒業生たち。卒業して15年以上経った今でも応援してくれているのです。まだまだ課題は山積みですが、これからも人と人との絆を大切にしながら、子どもたちに負けないよう私自身も成長していきたいと思っています。

「スナーダイ・クマエ絵画展」

カンボジアの「スナーダイ・クマエ孤児院」で暮らす子どもたちが教室で描いた、作品約150点を展示・販売するイベントを日本で開催。その売り上げは全額、孤児院の運営費に充てられます。3回目となった2011年は、メアス博子さんの母校甲南大学でも初めて開催されました。





○カンボジアの土産物店にも並ぶオリジナルTシャツ。絵画展でも好評でした。



本誌読者限定
抽選で
プレゼント
詳細はP26をご覧ください。

甲南学園 オリジナル・グッズは 愛校心を育てる!?

love for one's old school

新しいグッズが完成しました!
ーバーニーズ　ニューヨーク製エコバッグー

新しい甲南グッズが完成しました。甲南グッズは、主として同窓会の地域支部である各地甲南会へ参加された方の記念品としてお使いいただいたり、ご存知のとおり本誌「甲南Today」の読者のみなさまへプレゼントさせていただいたりしており、おなじみのボールペンやクリアファイル、時計などこれまでさまざまなアイテムを製作してまいりました。今回は、エコバッグです。一時期、環境保護への関心の高まりとともにブームとなったエコバッグ。すっかりおなじみのアイテムとして定着しましたよね。スーパーマーケットだけでなく、若者に人気のファッション・ブランドでもオリジナルのエコバッグを作製し、デザイン性の高いものを、買物用ではなくお出かけ用に持ち歩かれる方も多く見られます。甲南学園でも、現在まで数種類のオリジナルエコバッグをつくり、いずれもご好評をいただきました。

なぜ、数あるアイテムのなかからエコバッグを選択するのかと申しますと、①実用的である②持ち歩いていただくことが多いため、「甲南」の広告の役目を果たす③環境保護という視点が教育機関にふさわしい…など、使用される方と甲南学園双方にとってメリットとなる点が多いためです。特にこの数年は、老若男女を問わずお持ちいただける色やデザインで、長く使える耐久性の高いものをつくっています。発注した先は、１９２３年に創業したスペシャリティストアで神戸・旧居留地に国内４店舗目となる店舗を構えるバーニーズ ニューヨーク（ＢＡＲＮＥＹＳ　ＮＥＷ ＹＯＲＫ）。甲南高中のＯＢである木村和睦氏が社長を務めるアイディアリミックスクラブ㈱が甲南とバーニーズ ニューヨークを結びつけてくださいました。

「広報部様より、新しいエコバッグをつくりたいというご相談をいただいた際の条件は、〝若い人に喜んでもらえて、かつ年配の方も抵抗なく使えるデザインのもの〟〝品質に定評のある会社であること〟〝できれば、他大学のマネにならないように〟でした。数あるファッション・ブランドのなかから、弊社がお声を掛けたのが、バーニーズ ニューヨークです。全国に５つのショップを展開するバーニーズ ニューヨークは、「上品かつ洗練された」イメージを持ち、甲南が長年培ってきたイメージと近いものがあります。バーニーズ ニューヨークへ、甲南オリジナル・エコバッグの製作についてご相談させていただいたところ、担当者の方は、『これまで教育機関とコラボレーションさせていただいたことはありません。しかし、バーニーズが関西唯一の店舗を構える神戸において、その神戸を代表し伝統ある甲南学園様のグッズをつくらせていただくことは光栄でありますし、なにより今回の事をきっかけに甲南生の皆様にもっとバーニーズ ニューヨークを知って頂く機会になれば』と快諾してくださいました。

非常にたくさん提示していただいたデザイン案はどれもすばらしく、選考に困るほどでした。しかし、甲南の広報部の方はもちろん、バーニーズ ニューヨークのバイヤー、デザイナーの方々も粘り強くアイディアを出し合い、丁寧に検討してくださいました。学生さんの意見なども取り入れていただき、素敵な仕上がりになりました。ポケットも付いて実用的です。しかもよく見るとデザインの中に甲南の「甲」の文字が隠れているんですよ。私の両親も甲南の卒業生なのですが…このエコ・バッグを見ていると、斬新なデザインなのに、両親から聞いている古き良き時代の甲南を感じさせるというふしぎな魅力を感じます。

大学・学校のオリジナル・グッズは、もともと愛校心の強い方が特に好まれるものだと思いますが、在学時代に愛着の持てるグッズがあれば、学生の帰属意識を高める一助となるのではないでしょうか。〝大学名が入っていたらデザインや品質などどうでもいい〟というユーザーの目線を無視した姿勢では、多くの方に喜んで使ってもらえないうえ耐久性に乏しく、かえって経費の無駄だと思います。何より甲南のブランド・イメージに合わないのではないでしょうか。高額というより上質なもの。相手の目線に立ったグッズづくりが甲南にふさわしいと考えております。そういう意味では、弊社にとっても満足のいく結果が出せました」と木村氏は語ってくださいました。

以上のようにたくさんの方にご尽力いただき、非常に魅力的なエコ・バッグに仕上がりました。このエコ・バッグは、前述のとおり、各地甲南会や「オール甲南の集い」で手に入れていただく機会があります。また、本誌読者の方には、抽選でプレゼントさせていただきますので、Ｐ２６をご覧のうえご応募ください。

Online Magazine

Actualités du Lycée-Collège KONAN de Touraine-France

フランス甲南学園トゥレーヌだより

堂々と演じた1時間にわたる仏語古典劇。観客席からの喝采や賞賛とともに、生徒たちが得たもの。



本格的なホールで堂々と演じる生徒たち。右端が主人公の坂井さん。



フランス甲南学園トゥレーヌ赴任1年目に生徒たちの英語、フランス語のスピーチコンテストを見て、是非とも生徒たちによる仏語劇を実現しようと決意しました。これは、大変難しい挑戦で、本校でははじめての試みでした。和太鼓部が卒業式の翌日に恒例のチャリティーコンサートをトゥール駅の正面にあるVinciという大きなホール（700人収容）で行うのにあわせて、その大舞台で披露するという大胆な計画を立てました。

演目はフランス17世紀の喜劇作家モリエールの作品から戯曲『L'Avare＝守銭奴』を選び、台本を作成。タイトルは『Je suis Harpagon,qui n'aime que l'argent』、日本語訳は『吾輩は、お金大好き、アルパゴン』としました。

夏休み明けから練習するはずでしたが、高3生は大学入試の受験、高2生は秋の文化祭の準備等があり、思うように練習ができませんでした。それでも、休日、夜間を問わず時間を見つけては練習を重ね、年が明けた1月末には本校恒例行事である新年祭で披露。なんとかそれなりの評価をいただけるまでになりましたが、正直目指す水準にはほど遠い状態。そこで新年祭後に生徒たちを集め、「今日の発表は初めて皆が揃ったいわば通しのリハーサル。本番は２月１１日のVinciでの発表だ。それに向かってがんばろう！」と叱咤激励し、一致団結して練習に取り組みました。

いよいよ当日、舞台装置を整え、最初から最後まで通しのリハーサルを行いました。夕方になって衣装やメイク、手持ちの小道具が整うと、出演者たちは劇中の人物になりきっていくようでした。いよいよ本番です。

まずは、ナレーション、次に主役のアルパゴンの登場…第一幕が始まりました。生徒たちは堂々としていて、むしろ私の方が緊張していました。セリフをど忘れした場合などに備えていましたが、まったくの杞憂に終わり、1時間の上演時間にもかかわらず、極々若干を除き、終始セリフも完璧、演技もたいしたものでした。

実際、観客席から幕間ごとに大きな拍手をいただき、また発表後も「フランスの劇作家モリエールを演目に選び日本人高校生がこれに挑戦してくれたことに感謝したい」あるいは「大学時代に演劇をやっていてその難しさを知っているが、高校生がしかも外国語で演じたのですから敬服します」など、多くのフランス人からお褒めの言葉を頂戴しました。外国人が日本語で日本の古典劇を1時間演じることがどれほどたいへんなことかを考えれば、その意義や価値がおわかりいただけると思います。また、演劇はチームワークが大切な活動です。皆で力を合わせる連帯感、個々の責任感、相互理解のための仲間への信頼感と寛容さ、裏方さんへの感謝、これら無くして演劇は成立しません。個人のわがままを抑え、皆で団結して作り上げていくという活動を経験したことも将来何かの形で生かされればと期待します。

最後に、主役アルパゴン役の坂井良多くんはじめ、出演者全員にこの場を借りて賞賛とねぎらいの言葉を伝えたいと思います。『みんな、フランス語の発音がよかった！演技も上出来だった！おめでとう！』（副校長　橘木芳徳）

練習では、膨大なセリフを正確に発音するだけでなく、自然で流暢な言い回しや豊かな感情表現など、普段のフランス語の授業とは比べ物にならない高いレベルを要求されました。しかし、観客が劇の意図通りに反応してくれるのがとても快感で、演じているうち、単なる意思疎通の道具ぐらいに思っていたフランス語が、感情を響かせる魔法のように感じられるようになっていました。大学に進んだら本気でフランス語を勉強したい！今そう思っています。

主役を務めるのには大きなプレッシャーがありましたが、学校生活の最後の最後に心から「やりきった」と思える機会を与えていただき、指導していただいた先生、一緒に演じた仲間たち、そして支えてくださった多くの方々に心の底から感謝しています。



坂井 良多さん

こちら 甲南特捜部 PART ①

みなさまから寄せられた疑問を徹底調査！

“雑草”じゃない、“野草”なんです

草花を愛する心やさしい学生ー髙野（たかの）哲司（さとし）さん（理工学部生物学科4年次）

「兵庫県立明石公園で絶滅が危惧されている野草が見つかった」と新聞で見ました。見つけたのは甲南大4年次の髙野 哲司さんだとか。「明石公園の野草」というパンフレットも髙野さんがつくったと書いてありました。



明石城の歴代城主が愛でたと言われるフジバカマ。



3歳だった髙野さんが魅了されたホトケノザ。

「2年次の春から明石公園の野草調査に取り組んでいました。あるとき、地面からフジバカマの新芽を見つけたのです。フジバカマは、現在環境省が準絶滅危惧種に指定している希少な野草。明石城の歴代城主が愛でたと言われています。公園をきれいに手入れするあまり、種ができる前に刈り取ってしまっていたんですね」すぐさま公園管理事務所へ連絡、「明石の殿様が愛した花で、城ゆかりの品種という意義は大きいですよ！」と主張したところ、保護するため周囲に竹の柵が設置されたそうです。髙野さんは、その後も同公園の野草調査を続け、約300種を確認しました。そして、その成果を生かし、明石公園内で季節ごとに鑑賞できる野草の美しい写真を掲載したパンフレット「明石公園の野草」を作成したのです。

ほかにも髙野さんは、神戸市兵庫区会下山町にある公園で見られる植物をまとめた『会下山公園の植物』という冊子を制作したり、明石公園・会下山公園における植物の観察会で講師を務めたり、“草花”を軸に多様な活動を展開しています。どうして髙野さんは、それほどまでに草花の魅力に取りつかれたのでしょう？

「3歳の春に、親と田んぼのあぜ道を散歩していたんです。そのときにホトケノザという花が、耕す前の畑一面に咲いていました。見渡すかぎりピンク色の花畑を見て、あまりの美しさに感動したことがきっかけです。それ以来、庭にいろいろな植物の種を植えて一生懸命育てるようになりました。種からどんな芽や葉っぱが出るんだろう？花は何色なのかな？ってワクワクしながら世話をしていたんです」。

小学生になってからは、畑や花壇を学校の中につくり、中学生の頃は、身近にある少しふしぎな植物の自由研究に精を出すなどして、さらに草花の魅力にはまっていったのです。

高校では理科部に所属し、部活動の一環で冊子『会下山公園の植物』をつくりました。「開拓や自然破壊でどんどん野草が消えていくのがかわいそうで、後世に野草たちを残していくために自分にできることはないかと考えてつくりました」。

そんな充実した生活を送る髙野さんが高校3年生のとき、甲南大学に入学したいと思う出来事が訪れます。テレビやラジオに出演し、書籍の執筆及び講演活動も数多く行っている甲南大学理工学部田中　修教授の講演を聴いたのです。「植物の視点で分かりやすく説明してくださるお話に惹かれて」甲南大学を受験、見事理工学部へ入学し、田中教授のもとで学修・研究するという念願を果たしたのです。

大学入学後も、ボランティアで日本自然保護協会兵庫連絡会の自然観察指導員として草花たちを守り、その存在を多くの人に伝える活動に取り組んできました。

「草花は、鳥のエサや虫のすみかになるなどして、すべての生き物を支えている大切な存在なんです。また、地域の景観をつくる一員で、われわれを癒す役目も担ってくれています。雑草という呼び名がありますよね。踏まれても強く生きるといういい意味で使われることもありますが、邪魔者のようなニュアンスで“雑草”と呼ばれるのはかわいそうです。“野草”と呼んでほしいですね。お米だってもとは野草でも、もしかしたら病気を治す薬になる可能性を持っているかもしれません。乱開発などにより野草が絶滅していくことは、人を救ってもらえる可能性を人間自らが消してしまっていることなのかもしれないのです」。なるほど、説得力のあるお話です。

将来の夢をたずねると、「研究も大切ですが、調べたことをたくさんの人に伝えたいですね。草花を好きな人が増えて野草を守っていけたらいいなと思います。幼稚園や保育園の先生になる人に伝えれば、たくさんの子どもたちが小さい頃から野草に親しみをもち大切にしてくれることでしょう。甲南大学の岡本キャンパスにも野草がいっぱい生きています。1本の木に赤と白の花をつける源平しだれ桃や12月～1月に咲くヒマラヤザクラなど珍しいものもありますよ。いずれ甲南大学の花を観賞する観察会を開きたいです」とまっすぐな視線で答えてくれました。

まじめで努力家の髙野さんのこと、さぞや成績が優秀なのでは？「それが、草花のこと以外は苦手な科目もあって。ダメですね」と照れていました。いえいえ、得意なことを生かして社会貢献する髙野さんを、甲南の創立者 平生釟三郎は応援してくれていますよ。今後のさらなる活躍に期待します。





◎髙野さんが明石公園の野草について解説してくれる「明石公園自然観察会」

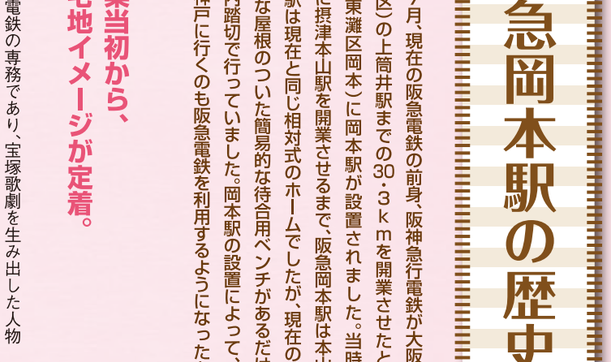
お問い合わせ　TEL：078-918-2405（花と緑のまちづくりセンター）　明石公園自然観察会　検索

こちら 甲南特捜部 PART ②

みなさまから寄せられた疑問を徹底調査！

阪急岡本駅の歴史について

甲南大学鉄道研究部が調査！



1920年7月、現在の阪急電鉄の前身、阪神急行電鉄が大阪梅田駅と神戸市葺合区（現：中央区）の上筒井駅までの30.3kmを開業させたと同時に、本山村岡本（現：神戸市東灘区岡本）に岡本駅が設置されました。当時、国鉄（現：JR）が1935年に摂津本山駅を開業させるまで、阪急岡本駅は本山村唯一の駅でした。当時の岡本駅は現在と同じ相対式のホームでしたが、現在のような立派な駅舎ではなく、小さな屋根のついた簡易的な待合用ベンチがあるだけで、上下線のホームへの往来は構内踏切で行っていました。岡本駅の設置によって、本山村の住民は大阪へ行くのも神戸に行くのも阪急電鉄を利用するようになったといいます。

また、岡本周辺は梅の名所として有名であり、駅東側にある踏切は『新梅林踏切』という名称がつけられています。1955年ごろまでは駅の山手側にある梅林が有名で、かつては阪神間の各地から観梅を楽しむ乗客が岡本駅に多く訪れたといいます。この梅林は市街地化によって消滅してしまいましたが、1970年に岡本にある保久良神社境内に250本の梅が植えられ、保久良梅林と名づけられました。今ではこの梅林を一目見ようと多くの乗客が岡本駅を訪れます。

現在の駅舎に改築されたのが1979年。それまで改札口周辺が狭く、朝夕のラッシュ時には通勤通学する乗客で混雑しており、また駅前道路には放置自転車が多く置かれ、かなり手狭であったそうです。そのような混雑の緩和を目的に、タクシー乗り場や自転車置き場、飲食店がある「阪急岡本プラザ」を擁する駅ビルとして再スタートしました。

1995年には阪神淡路大震災で神戸線が不通になりましたが、岡本駅は大きな被害もありませんでした。神戸線全線が復旧された同年6月にはダイヤが改正され、同時に岡本駅に特急が停車するようになり、利便性も向上しました。今日も多くの乗客に利用されているのはみなさんご存知のとおりです。

駅の開業当初から、高級住宅地イメージが定着。

当時、阪急電鉄の専務であり、宝塚歌劇を生み出した人物でも有名な小林一三氏は沿線開発に積極的でした。同氏は神戸線よりも先に開業した阪急宝塚線において、当時田園が広がっていた同線沿線に乗客を呼び寄せるために分譲住宅開発を行ったところ乗客増に成功、そこで彼は駅開業と同年に当時田園地帯の広がっていた岡本地域の住宅開発に着手、翌年、駅周辺に1万7500坪の『北畑住宅地』が分譲され沿線住宅地開発の糸口を作りました。住宅地の北部の山手側は緩やかな南斜面であったので雛壇形式の宅地が造成され、土地形式にあった宅地開発がされました。

現在の岡本駅周辺は洋風でおしゃれな邸宅が並んでいますが、当時は入母屋式で日本瓦葺きの杉皮が張られた和風住宅が好んで建てられました。小林氏の自叙伝には、『今日まで何千何百件の建売をしたけれども、阪神間高級住宅街においてすらも、純洋式の売家は買い手がない』とあり、当時岡本周辺に住んだ阪神間の商人には、和風住宅が好まれたことがうかがえます。



阪急ワールド全集「阪急ステーション 写真で見る阪急全駅の今・昔」（阪急電鉄コミュニケーション事業部／編集）阪急電鉄全駅の誕生から現在までを写真とエピソードで紹介した貴重な資料。現在は完売により手に入らない。

●鉄道研究部のHP　http://www.club.konan-u.ac.jp/~tetsuken/

あの佐渡 裕さんが甲南大学に来学されました！

2011年7月17日・24日（ともに日曜）、世界で活躍する指揮者 佐渡 裕さんと スーパーキッズ・オーケストラが、甲友会館でリハーサルを実施されました。



「スーパーキッズ・オーケストラ」とは、日本中の小中高生の中からオーディションにより選抜された、才能ある音楽家の卵たちで編成される楽団です。

彼らの大人顔負けの演奏技術に、毎年8月下旬に西宮の兵庫県立芸術文化センターで開催されるコンサートが大好評なのはもちろん、佐渡さんの、子どもたちを一流のオーケストラに育てる"指導力"とその過程が大いに注目されています。

甲南大学は、ジュニアの育成活動やスポーツ・文化活動を支援する活動を数年前より行っており、その一環として、「佐渡 裕とスーパーキッズ・オーケストラ」を"提供"という形で支援しています。

そうしたご縁から、甲友会館の大ホールをリハーサル会場としてお貸しすることになり、"甲南大学関係者（学生生徒及びそのご父母、卒業生、教職員）のみに限り"リハーサル見学の機会をいただきました。諸般の事情によりHP等では見学ご希望の方を告知させていただくことができなかったのですが、口コミにより、17日・24日合わせて300名近い見学者がお越しになりました。

総勢50名のスーパーキッズ・オーケストラは、最年少が何と小学3年生。17日は彼らの初めての合同練習でしたが、スーパーキッズの名に恥じない非常にクオリティの高い演奏で、聴衆のみなさんを驚かせました。

リハーサルを見学できるということは、ある意味本番より貴重な機会ですが、さらに24日には、佐渡さんのご配慮で、甲南大学のために特別に「リバーダンス」を演奏してくださり、まさにプレミアムな一日となりました。



学長補佐 井野瀬 久美恵 教授（文学部）が 日本学術会議会員に！

本誌P3～7でもご紹介している、学長補佐 井野瀬 久美恵 教授（文学部）が日本学術会議会員に任命されました！

井野瀬教授は、2008年10月に連携会員に推挙されていましたが、このたび会員（任期6年）に任命され、2011年10月3日、総理官邸での任命式に臨みました。

第22期を迎えた日本学術会議の会員は、我が国の全学問分野・領域の科学者約84万人から選ばれた210名（うち約半数が新会員）から成り、井野瀬教授は、第一部（人文科学・社会科学）・史学委員会に所属して、我が国の学術発展、政府への提言、産業界との連携、国民への発信といった活動の最前線を担うことになります。

なお、本学からは、以下の教員が日本学術会議連携会員として選ばれています。

櫻田 嘉章（法科大学院教授）※
園田 寿（法科大学院教授）
谷 富夫（文学部教授）※
土佐和生（法科大学院教授）
藤田 昌久（学長直属特別客員教授）※

※の任期は、平成29年9月30日、それ以外の任期は平成26年9月30日

体育会男子バレーボール部が関西秋季1部リーグ戦で優勝！

選手たちの豊かな個性が集結。持ち味のすべてを発揮し、快挙を成し遂げました。

男子バレーボール部は、秋季リーグ戦で1部優勝という16年ぶりの快挙を成し遂げました。

初戦の関学大、続く大商大の強豪チームを下し、好調な滑り出しを切った本学。高い返球率を誇るリベロ（守備専門）辻口智也さん（文2）・南侑佑さん（経済4）や俊敏にコートを駆け巡る中山貴之さん（法2）などの安定したレセプション（サーブをレシーブすること）から、ポーカーフェースのセッター（トスを上げる役割）浜嘉宏さん（経2）の絶妙なトス回しで、高速コンビネーション攻撃を繰り広げ、その後も順調に白星をあげていきました。

そして迎えた最終戦。大産大との戦いは序盤から甲南のペースに持ち込み、山本寛生さん（経3）のブロックがさえて何本ものスパイクをシャットアウト。メンバーチェンジで出場した南昂さん（経3）は、第1セット、第2セットでサービスエースを決めてくれました。センター陣の活躍も目覚ましく、高いジャンプ力を持つ長谷川智之さん（法4）、多彩な速攻で相手のブロックを翻弄する西卓真さん（文3）の高速クイックがさく裂。持ち味すべてを発揮する最高のゲーム内容で戦い抜いた結果、3対0のストレート勝ちで悲願の1部優勝を決めました。

「最高の結果に結びついたのは、キャプテン田畑翔伍くん（経4）が個性豊かな選手たちを統率し、一人ひとりが最大の力を発揮できるチームを作り上げたから」と、濱頭辰治監督からコメントをいただきました。

12月24日には、セミナーハウスで祝賀会を開催。学園がオフィシャルスポンサーを務める堺ブレイザーズから、副部長の田中幹保さん（元全日本代表監督、選手）がお祝いに駆けつけてくださいました。

甲南高等学校同窓会総会・懇親会のご案内

【日時】2012年5月26日（土）
総会14時～
【場所】平生記念セミナーハウス
【会費】2,000円（大学生・院生は無料）
【内容】平成24年度総会、記念講演会「松下弘幸（ヒロ松下）さん」、パネルディスカッション、高中ブラスアンサンブル部演奏、懇親会

体育会戦績報告（敬称略）

みなさんのファイトに心より拍手をお送りします。

【弓道部】

三十三間堂大的全国大会（1月）
堀川早紀（文2）：個人第4位

【自動車部】

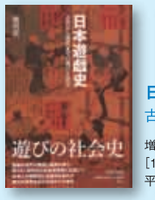
全日本学生自動車運転競技選手権大会（11月）
猪目祐介（理工3）：小型貨物Bの部第8位

JAF全日本ダートトライアル選手権シリーズ（4～10月）
竹本幸広（経営4）：N1クラス第6位

【少林寺拳法部】

少林寺拳法関西学生新人大会（12月）
釼持朝美（文3）：女子運用法の部最優秀賞
椋本祥太（知能情報3）：男子運用法重量級の部最優秀賞
田井地剛（法2）：男子運用法軽量級の部最優秀賞

甲南大学の教員と卒業生が執筆した 新刊レビュー



日本遊戯史
古代から現代までの遊びと社会

増川 宏一
［1949年旧制甲南高等学校卒業］著
平凡社　¥3,200（税別）

PRESENT ご希望の方は、同封のアンケートハガキにてご応募ください。

応募締切／2012年5月31日到着分まで



抽選で15名様に！
甲南×バーニーズ ニューヨークエコバッグ
P22で紹介した甲南大学とバーニーズ ニューヨークとのコラボ制作「エコバッグ」をプレゼントいたします。



抽選で10名様に！
僕はいかにして指揮者になったのか
佐渡 裕 著（新潮文庫）
「自称"音楽界の雑草"から世界最高峰のオーケストラ、ベルリン・フィルの指揮台に。夢を追うすべての人を励ます佐渡裕さんの人生譜歌」をプレゼント。

次号は2012年7月上旬発行予定

甲南Today 2012 Mar NO.41
発行日／2012年3月25日
発　行／甲南学園広報部
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9-1
TEL（078）431-4341（代）

【お詫びと訂正】
「甲南Today」No.40において、毎号華やかに表紙を飾ってくださる西井 義晃さんの紹介がされておりませんでした。ご本人および読者のみなさまに深くお詫び申しあげます。なお、本号ではP02にて西井さんをご紹介しています。